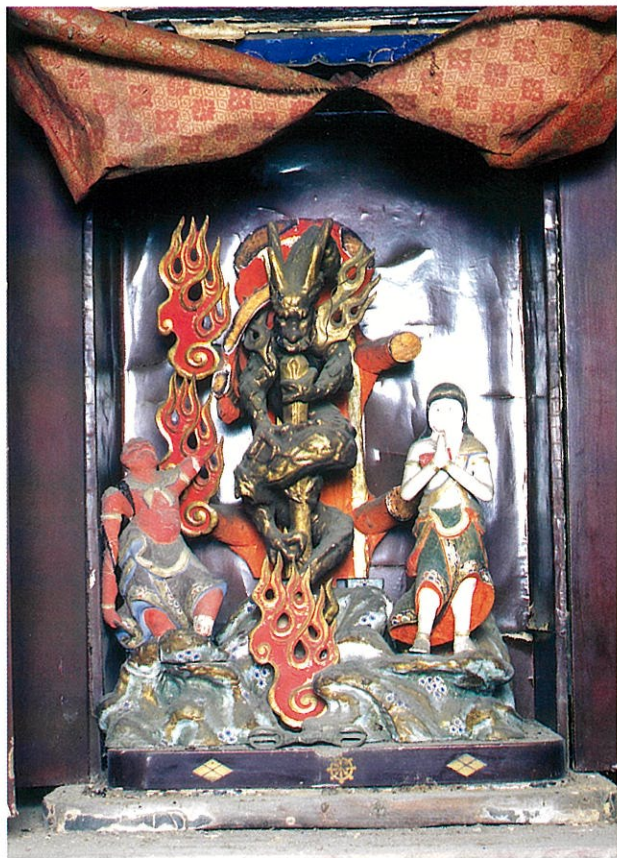


復刻版

大里村

草刈りかた





く 梨 か ら 不 どう 尊
俱 梨 伽 羅 動 尊



恩田のささら獅子舞

復刻のことば

大里村長

吉原文雄

大里村は、のどかな田園風景を今にのこし、人びとは恵まれた自然環境の中で、幾世代にもわたって生活を営み、貴重な文化遺産を私達に伝承しております。しかし、これらの自然や文化遺産は今日の激しい社会の変貌により次第に失われようとしています。

さて、現在「地方の時代」が提唱され、田園都市構想」が議論されるなか、時代は大きく変化しつつあります。このような時期に本村では平成七年度に二十一世紀を目指し「第三次大里村総合振興計画」を策定し、長期的視野にもとづく各種施策に取り組

んでおります。しかし、これらを実現し、伝統と発展との調和によるまちづくりには、村民各位のご理解とご支援を欠くことができません。

このほどここに、「大里村のかたり草」を復刻するにあたり、収録された昔話、伝承を通じて大里村のかつての地域の様子や暮らし、そして、先人たちの考え方などを知る参考にしていただき、この冊子が、ふるさと大里村に対する関心と愛郷心を深めるのに役立ち、村勢発展の一助になれば幸甚であります。

おわりに、本書を復刻するにあたり当時の出版に際し、貴重な資料をご提供いただいた多くの村民の皆様並びに関係機関のご好意とご協力に改めて心から感謝申し上げます。

平成十年三月

復刻にあたって

大里村教育委員会
教育長 金 井 岩 夫

私達の郷土にも原始・古代の昔から、人々の生活の跡があり、たゆまぬ文化の創造が行なわれ、今日の大里村の礎となっております。

こうしたなかで、昭和五十三年に大里村の伝統的な生活文化、伝承を収録した「大里村のかたり草」が刊行され、その後二十年が経過し、今日の大里村がどのような経過をたどって形成されたか、あらためて歴史的に見つめ直すとともに後世に伝えていくことは、単に昔を回顧することに止まらず、私達の責務であると思っております。

文化事業は大変な苦勞が伴うわりには、成果とし

て目に見える部分は少ないものであります。今回、本書を復刻するにあたり、忘れ去られようとしている私たちの身近な昔話に接し、先人たちの残された足跡に思いを寄せ、古くから伝わる伝統にもふれていただき、村の心豊かな発展に役立てていただければと願うものであります。

おわりに、「大里村のかたり草」を刊行するにあたり貴重な史料をご提供下され、また、調査のために積極的に御協力いただいた多くの村民の方々のご好意と関係機関に対して感謝申し上げ、復刻にあたってのご挨拶と致します。

平成十年三月

刊行のことば

大里村公民館長

高山 昇三郎

私達公民館は豊かな人間形成をめざし教育文化の向上により老若男女を問わず、すべての村民が健康で文化的生活を営めるようあらゆる機会を通じ、それぞれの学習を積み、住みよい明るい郷土大里村を築くため、皆様方の要望に答うべく指導育成につとめてまいりました。

日頃明るい人情味溢れる豊かな村づくりに御協力戴いております皆さんに対し厚くお礼申し上げます。

此度公民館活動の一端として、高齢者教室において「村内民話の掘起し」と題しての話し合いを

進める中で、昔から話し継がれたことを活字にし幼い頃からの茶の間寝話しになって来た尊いかり草を、後世に残し未長く親しんでいただくことの願いから此の程発刊の運びとなりました。

この民話伝説の発掘は各分団毎に集いあい、高齢者方々のありのままを録音テープに収録、原稿をもとに一年有余の歳月をかけ綴られたもので、郷土の良き友として長く保存され、昔をしのびながら懐かしみ後世に伝え、子供達に読み聞かせられれば幸いと存じます。

編集に当り老人会役員方々の格別なるお骨折りに対しまして厚く感謝を申し上げます、今後共公民館事業振興のため、より一層の御協力を賜りますようお願い申し上げます、発刊にあたっての挨拶といたします。

昭和五十三年十一月一日

刊行にあたり

大里村 長

堀 茂平

故郷ふるさとという言葉は人々にほのぼのとしたものを感じさせ、そこに古くから言い伝え語り継がれた昔物語はその土地の歴史を物語っています。

今回老人クラブの方々のご努力により、大里村内の民話をまとめた労作「大里村のかたり草」として発刊して戴きました。

心からそのお骨折りに敬意を表しますと、共に長く大里村民の心の糧となりますよう念願して止みません。

昭和五十三年十一月一日

刊行にあたり

大里村教育長

小池 敬介

先人達の大きな努力によってつくられてきた、長い歴史の中から生れた民話の数々は、現代まで多くの人達によって大事に語りつがれてきました。私達の住む、ここ大里の地にも何か心にはのぼのとしたものを感じさせる数多くの民話、あるいは地域の行事等が残されてきました。

こうした貴重なものを後世に是非伝えたいという声が高まり、それらを多く知る高齢者の方々のご協力をいただき「大里村のかたり草」の発刊の運びとなりました。

勿論手づくりの素朴なものでありますが多くの

方々に読んでいただきたいと思います。

最近の科学の発達、経済の成長はめざましいものがあります。しかし、反面人間性が問われていることも事実です。

この民話集が故郷を知り、故郷を愛する心を生み、情緒豊かな人間に育つ道しるべとなれば幸いです。

昭和五十三年十一月一日

刊行にあたり

大里村連合老人クラブ会長

斉藤 喜安

私達の大里村は長い歴史と伝統、そして美しい自然にめぐまれた、香り高い純農村であります。この豊かな村に、今まで人に知られない埋れた民話、そして、また長い歴史の中で子々孫々に、言い伝えられてきた数多くの伝説や昔物語などを発掘する計画が、村の教育委員会社会教育部門と公民館でなされました。

偶々私達高齢者が、この発掘の第一線を担当することになり、一年有余の歳月と、老人会百余名の全会員の御協力をわずらわし、ここに初めて発刊の運びとなりました。

この民話「かたり草」の中で、私達の祖先の歩んできた尊い昔の姿が、そして現在までの歩みがつぶさにうかがうことができますので、誠によかったと感入であります。

この美しい、伝統ある大里村を、こよなく愛し高い誇りをもって、守り育てていただくためにもこの民話を、後世に永く伝えたい一念でございます。今、民話集の発刊にあたり、皆様方のご協力を心から感謝申し上げ、所信の一端をのべ私の言葉に代えたいと思います。

昭和五十三年十一月一日

はしがき

大里村高齢者教室主任講師

大久保源左エ門

「としよりが居てくれてこそ気強い暮らし、何を聞いても生き字引」これは至って円満な家庭の若い者が老人を尊敬し、たよりにしている心から出たうれしい言葉だと思います。

一村とても同じこと、郷土に伝わる尊い民話や伝統について物知り博士は老人です。この尊いから草をあの世に背負って行ってしまうても閻魔さまのお土産にもなりません。

この事に気づいた高齢者教室から火の手が上り村に伝わる民話など語り伝えて後の世迄もと意気込んで、老人クラブ第一分団から八分団まで隈無

く掘り起しの集いを催し貴重な資料を得ました。

これが公民館、教育委員会、村当局の積極的指導に依り一冊の本となって後世に残される何とすばらしいことでしょう。このよろこびと、大感激を胸一ぱいに抱いて、明るく楽しくバラ色の老後を限りなく生き生きと力強く生きつづけてゆける大里村高齢者教室こそ、輝く大偉業を成しとげたよろこびに今、金色に輝いています。

「大里村のかたり草」この本が大里村の宝物として後世迄語り伝えられていくことを心から願いはしがきといたします。

昭和五十三年十一月一日

目次

復刻のことば	吉原文雄
復刻にあたって	金井岩夫
刊行のことば	高山昇三郎
刊行にあたり	堀茂平
刊行にあたり	小池敬介
刊行にあたり	斉藤善安
はしがき	大久保源左エ門

第一分団 上恩田、中恩田、下恩田、替津田

一、諏訪神社の獅子舞い	12
二、目印しの一本松	16
三、替津田のいわれ	16
四、火傷を負った俱梨伽羅不動尊	18
五、樽神輿	18

六、金蔵寺の由来

第二分団 手島、小泉

一、川上へ進んだ大樫材	21
二、棒使いの名人	22
三、血の出る薬人形	23
四、駒形の地名	23
五、ひんぱんだった手島の火事	24
六、聖職を完うした看護婦	24
七、愛宕神社、八尾神社	26
八、石宮	27
九、力士『風呂桶山』	28
十、八木節笠踊り	29
十一、手島の八幡様	30

第三分団 屈戸、天水、津田新田

一、養子に行った観音様とすのこ橋……………	31
二、たたくと女の音色を出す半鐘……………	32
三、お行人さま……………	33
四、常陸ばあさん……………	34
五、市田太郎……………	34
六、おしっさま……………	35
七、天水のむかし、むかし……………	36

第四分団 中曾根、吉所敷、沼黒、高本

一、高城神社と高本の地名……………	38
二、たんぎくどん……………	39
ア、弁当が仕事をする話……………	40
イ、縄ないの話……………	41

ウ、たんぎくどんのお使い……………	42
エ、青麦を刈るたんぎくどん……………	42
オ、岡での小用の話……………	43
カ、休みながらの溜かえ……………	44
キ、あぶない！杭にささえられた旦那……………	44
ク、石うすとたんぎくどん……………	45
三、こわいお不動様……………	46
四、くろふだ稲荷……………	46
五、息障院のお墨付き……………	47
六、藩行跡……………	47
七、いぼとり地藏……………	49
八、のんきな信さんとかみそり縄……………	50
九、うりの産地……………	51
十、鶴にだまされた信さん……………	51
十二、十日前の稲荷……………	52
十三、通殿川……………	52

十三、墓地の二重掘り……………	53
十四、不思議な観音像……………	53

第六分団 相上、玉作

一、どんどん橋……………	66
二、河川問屋……………	66
三、玉作りの地名……………	67
四、玉作の不動尊……………	67
五、亀井の井戸……………	70
六、ひぎ喰い橋……………	71
七、ひよつとこ名人亀井の市さん……………	75

第五分団 津田、向谷

一、一本橋と鷹匠湯……………	55
二、一本橋の水騒動……………	56
三、八幡様……………	57
四、百万べんの数珠……………	57
五、馬頭観音堂……………	58
六、根精様……………	59
七、常習水害地帯……………	61
八、沼黒土手……………	61
九、火防の稲荷……………	63
十、長福寺跡……………	65
十二、向谷の飛び火で玉作の寺が全焼した……………	65

第七分団 箕輪、青山

一、青山の小字名と吉見小学校庭……………	76
二、夜中に鯉をつかまえる名人……………	77
三、一本松をがんばって安く売ってきた人……………	79

四、殿山の由来……………	79
五、昔の鎌倉街道……………	80
六、冑山古墳の由来……………	80
七、えんとつ房さん……………	81
八、箕輪の大蛇……………	82
九、冑山の庚申塔……………	82

第八分団 小八林

一、隅の淵、中の淵、新家敷の淵、俵淵……………	84
二、小八林の名……………	85
三、一本松……………	85
四、善正坊……………	86
五、清水の水……………	86
六、白山さま……………	87
七、庚申さま……………	87

八、横堤について……………	89
九、小八林の天王様と神輿……………	90
十、大里村の大蛇……………	92
大里村のかたり草資料提供者……………	94
あとがき……………	96
題字 大里村長 堀 茂平……………	

第一分団（上、中、下恩田、替津田）

（一）諏訪神社の獅子舞い

① 諏訪神社の由来

諏訪神社は古い歴史をもっている。現在の社殿は、明治三十年に再建されたもので、当時の下恩田の氏子四十五戸が一丸となり、資材の運搬、参道の改修、社殿敷地の土盛りなど一切が人力の奉仕によってできた。当時としては近郷の中でも珍しい立派な社殿でした。

明治四十四年の神社令によって、中恩田、上恩田の神社を合祀、ここに三恩田の合社ができあがった。このことは社殿前に現存している記念碑に記されている。

② 諏訪神社の獅子舞い（別名恩田のササラ）

イ、由来

伝説によると昔、下恩田地内に恐ろしい厄病が発生した。そのために獅子舞いを行い、村外れに大へいそくを立て、これを一人が刀で切り倒し、その時立合った村人は一斉に逃げ帰り、病魔を追い払ったという。それ以後、獅子舞いは豊年を祈るとともに悪魔払いの行事として親しまれ、年に一度おこなわれた。

獅子舞いは約百八十年程前から始まったと伝えられる。毎年旧暦七月二十七日（今の九月九日）が例祭であった。

獅子舞いは村人達にとって老いも若きも唯一の楽しい郷土芸術で、親戚近在より多数の見物参詣人がくり出して来た。境内の杉林の中まで売店と

人で埋められそれはそれは賑かなものでした。

神事として行うことは



ロ、ササラ舞い

『盆が終れば恩田のササラ、待ちるササラに雨が降る』ということばが今も残っているように、村を挙げての大祭でした。

毎年旧暦の七月二十七日には桂雲寺に勢ぞろいしたササラ行列は、神社にくり出した。

- 花見ヘイガクシ（へいそくを飲む）
- スリコミ、スリダシ（獅子の挨拶）
- 女獅子かくし（恋の意味）
- 田の草取り（一番取り、二番取り、三番取り）

行列の順序は、豊作を祈る大花万燈を先頭に、昔ながらの山伏姿の法院が、ほら貝を吹きならし、三獅子（法眼、女獅子、男獅子）が、テッコタツツケバカマ、わらじばき、巴の太鼓を身につけその後に笛吹き七、八名、歌い手七、八名、花笠の子供四人、ハツカ棒の子供二人が続いた。村人達の行列は誠に古式そのままの姿である。この大行列は氏子の家を順次悪魔払いをして歩

いた。

「恩田のササラで棒揃い」ということばの通り字内の青年が赤青のタスキ、ザンザ笠に、六尺棒を持った棒使い連中が掛声勇しく、（立棒、クツシ、井ゲタ）などを行い、字内を一日中ねり歩いた。

この棒使い行事が終る頃、急に笛、太鼓の調子が改まり、歌奴がうたいだす。ご神歌が又珍しい歌詞でした。

○めぐりきて前のお庭をながむれば、前は水泉、しだれ小柳。

○此の宮は何たる大工が建てたやら、くさび一本、四方かたまる。

○この宿は何たる宿に御座候、縦十五里、横七里。

○雨が降るそで雲がたつ、おいとま申してござ、いざ、もどらぬか。

此の歌がでると獅子が、どっさら、どっさらと腹に抱いた太鼓をならして、その家の門から退出次の氏子の家に廻っていく。

獅子舞いをする子供は、次代につなぐべく下恩田地内の長男に限られていた。

こうした大行事はずっと続いていたが、大東亜戦争後の社会変遷で、昭和二十九年を最後に休止となった。今では祭礼当日ささやかな略式行事として残されている。

諏訪神社は年五回神官による祭典があり、貴重な獅子や太鼓は、年々用番組（村の世話役）に引きつがれ、三獅子箱に保管、四月十一日を諏訪神社祭礼日と定め、桂雲寺に三獅子を飾り氏子中が

集まり豊作を祈って、一日を楽しんでいる。

(二)目印しの一本松

大里村上水道の水源がある南西に、小さな土の山がある。その上に松の木が生えている。

これは昔、荒川が村内の地を流れていた頃、物資の輸送に船を使った。

船頭達の目印松として、植えたものと伝えられている。この松は二代目の松である。

初代の松は残念ながら枯死してしまったが、今でも八畳ぐらいの松の根だけが残され、往時を偲ぶことができる。

又、初代松の根元には、船の安全を願って船頭達が祈願した三峰様が祀られている。



目印の一本松

(三)替津田のいわれ

元は中恩田の地続きであったが、土地が低く大雨の都度水害にあった。

幾度となく水に悩まされた人々が、家を新築するたびに東の高い土地へ移り住んだ。

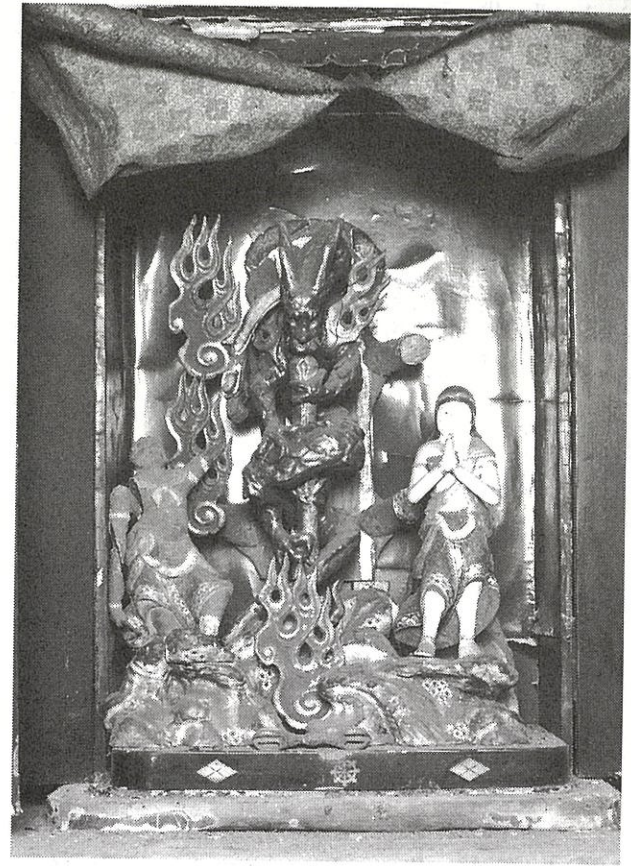
こうして現在の様な飛地になったものと伝えられている。

(四) 火傷を負った倶梨伽羅不動尊

倶梨伽羅不動尊は現在武田ひろさん所有の土地に祀られてあり、三百年前武田家が秩父から移住する時に一諸に移したといわれる。又、大正初期までその場所に行者が住んでいたとのことである。

行者は甲府の方から来ていたということから甲斐の国と何らかの関係があるのではないかと考えられる。あごの近くには火傷があり、戦国の時代に戦火にあったものではないかと思われる。

この不動尊は不動明王の変化した形とも思われ黒い竜が剣にからみついてこれを飲もうとし、その背後に炎が燃えあがる形で表現されている。こんな珍しい不動尊は日本に三体しかないと言われ鮮やかな昔のままの彩色で安置されている。



倶 梨 伽 羅 不 動 尊

(五) 樽神輿

この祭祀のおこりはかなり古い時代のことと思われる。言い伝えによると天王様のお祭りは疫病除けの神事といわれる。昔、この地域に流行病が発生したとき他家に伝染しなかったという御利益があった。

このため天王様は神様への御礼祭りとして始まったといわれる。

樽神輿は明治の中期から始まり、子供の祭りで毎年七月十四日から十五日が例祭である。

お祭りの日が近づく子供達は準備にとりかかった。六尺位の長さの丸太棒を井桁に四本組み、それに醬油樽を結び付け真中に轡を立ててご神体とし、四方に灯籠をかざり立派なお神輿を作った。明治末期から大正時代までこのようにしてお祭

りが続けられた。その後、昭和四年頃、当時の区長武田儀平氏が大字の祭りとして字民一同の同意を得て神輿を新造した。武田氏は常に敬神の念の厚い人だった。又武田氏は蚕種製造業者でもあったことから、養蚕の振興には生涯をかけた人でもあった。

そうした関係で神輿の保管についてはお宮がなくとも武田家の倉庫に、丁重に管理されてきた。お神輿が出来た当時、中恩田の天王様の晩は、近隣近村の若い衆が集まり大変なにぎわいだった。昨年のお祭りにも県立施設「おお里」の子供が多数参加して、かわるがわるお神輿をかつぎ大喜びしていた。

時代が移り変わっても疫病除けは、村内安全を目標に盛大に続いていくことでしょう。

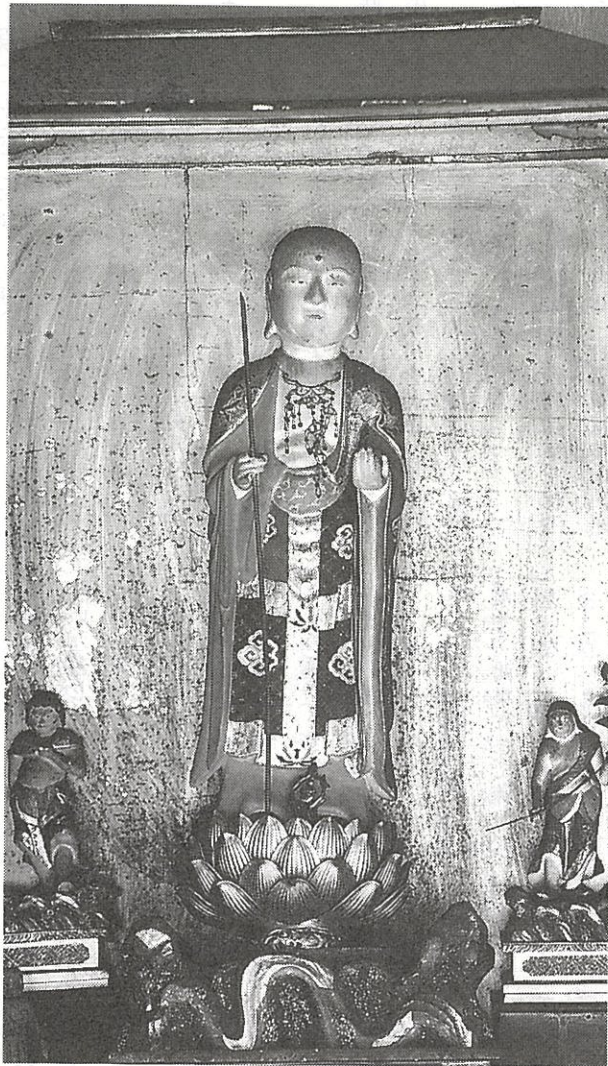
（六）金蔵寺こんぞうじの由来

中恩田の金蔵寺は元禄時代前に開基されたものと思われるが、開基の法師は元禄十三年に入寂した。美濃（岐阜県）の近在の人と言い伝えられている。

本尊様は地蔵像で木彫りに金箔がほどこしてある立派なものである。

立像で、高さは七十五から八十センチ位あるが、三百年は経ていると思われ、由緒ある文化財ということができる。

金蔵寺は真言宗で比企郡吉見町の御所、息障院の末寺で今では大里村小泉常永寺の住職がその管理を兼務している。



金 蔵 寺

第二分団（手島、小泉）

（一）田所家の大櫓

小泉の田所家という豪農に目通り一丈八尺（約五、五メートル）の大櫓があった。

この櫓は関東地方でも有名な大木でした。

京都の西本願寺の改築に必要な櫓を見つけ、当時歩いた秩父の材木商加藤喜平治氏に売却された。伐採されたのは明治十五年で荒川を利用し、京都へ搬入する予定で荒川まで搬出したところ、荒川が増水し見当らなくなりました。

昭和八年頃、荒川砂利採集船で砂利採集を行っていた折、なにかに当り一日砂利採集が出来ない事があり、仕方なく方向を変えて採集を行っていたという話を聞き、小泉の人がそれは田所家の大

櫓に間違いないと加藤氏に連絡を行った。

早速秩父より人夫三人夫々三メートルの鉄棒を使い、差し込んで探したがわからないので、四メートルに変えて再び探した。六日間探したが依然としてわからない。

この鉄棒は今も尚、田所常久氏宅に保管されている。

その後、さぎ波の立つ浅瀬があったのでここだと思い、秩父の買主へ連絡したがそのままでした。しばらくたって、大きな荷馬車が熊谷の方面へ運んでいくのを見たが恐らく之が何回かの流川増水で、鴻巣在まで流れていった田所家の大櫓に間違いないとの言い伝えになって、今に至っている。



（二）棒使いの名人

手島の竹井晃さんの家に檣の六尺棒が有った。

これを使ったのは竹井さんの何代か前に大力無双の人がいた当時の話である。

熊谷宿の人が魚とりに荒川へ来た帰りに、晩の

おかずに手島の人を作っていた大豆をいつも取っていた。

ある時、こらしめてやろうとして大豆を盗みかけた人に、この六尺棒を振りまわしたら件の人はほうほうの態で逃げ帰ってしまった。

其の後、大力無双の竹井さんが熊谷の茶店で酒を飲んでいたら、前のことを根に思っていた面々がぐるりとまわりを取りかこんで『今日は、仇討ちだ、さあこい』となぐりかかろうとした。これを見た呑み屋のおかみさんが『だめだよ！みんなしてまるまってかかってもかなわないよ！』と言った。それを聞いた面々は驚いて、又コソコソと逃げ帰ったという。

それ程腕の立つ強い人だった。その時の六尺棒は大切に保存されていたが戦災で焼失し今は無い。誠に残念である。

(三) 血の出る藁人形

昔、手島は頻繁にこそ泥棒が横行した。困った村民は早速藁人形を作って竹槍で突かせることにした。『普通の人が突くと鮮血が出ないが、犯人が突くと見る間に、鮮血がほとばしる』と説明して、村中の人が一人残らず順に突く事にした。ところが、突かぬ前から一人の男が真青になって、ぶるぶるふるえ出した。

この男が犯人だった。村中に謝罪し改心した。それから手島では二度と泥棒が出なくなったというのである。



(四) 駒形の地名

手島には大字手島、小字駒形という所がある。此の名の起源について次のように二つの説がある。一つは、関東でも有名な上岡の観音様におまいりに来た殿様が、駒をつないだのでこの名がつけられたという。

又、一説には源頼朝が鷹狩りに来た時、帰りに

一休みし、馬をつないだのだという話がある。

地名のおこりについて、いづれが正しいか明らかでないが、えらい殿様が駒をつないだという点が共通している。

の口、三ヶ尻十六間』と三度言うと火がつく、それでもまだ火がつかない時は、『手島だノ手島だ、手島だノ』と三回唱えると火がついたと言われる程だった。

(五) ひんぱんだった手島の火事

明治二年十二月三十一日夜、手島の上の方から出火した火災が大火となり、五軒だけ残してすべてを焼きつくしたことがある。

又、二年後の明治四年にも大火があった。

大東亜戦争の空襲でも四軒火災を蒙った。度々、手島では火災がおこるので、近隣に有名となり、かまどの下にまきを入れて火をつける際には『火

(六) 聖職を完うした看護婦

明治四十三年（旧暦）七月六日七夕の前の日だった。

荒川の大増水で手島、小泉の堤防が決壊し物凄い勢いで濁流が侵入し、たくさんさんの家屋が流され本村史上未曾有の災害を受けたのだった。

その時、信州生れの看護婦さんが、小泉にあった避病院に勤務していた。

折しも、入院していた小さな男の子をかかえて、

逃げようとした時、家の梁でおしつぶされた。

看護婦さんは、子供を助けようとの一念で、我が身も省みずしっかりと子供を抱き、上から覆いかぶさるようにして、二人とも既にこたえていた。村民はこの尊い看護婦さんの姿を拝み、泣かぬ人はなかった。

この勇敢な行爲と燃えるような責任感は強く強く村民に感銘を与えた。此の聖職を完うした看護婦さんの遺骸は、小泉常永寺境内に手厚く葬られております。

今でも益、彼岸の墓参の折、村民はこの看護婦さんの墓前にお線香を上げ、あの時の美談を永く後世に伝えている。

⑪ 避病院は

伝染病患者等を隔離した病舎で小泉字大塚

にあった。



(七) 愛宕神社、八尾神社

田所家の先祖は京都に住んでいた。京都の田所家の宅地からの方位方向と似た位置に、小泉の愛宕神社と八尾神社を建てたのではないかといわれている。

創立は元禄時代の初期で、田所家の石塔によると、愛宕神社と八尾神社に、石燈籠ならびに菩提寺常永寺の表門を、田所治兵衛氏が建立したと記録されている。

神託によると愛宕神社、八尾神社の氏子は農耕馬、荷馬車、及び乗馬用の、毛色の白い馬は飼育できなかった。

又、家屋の棟に高い煙突をつける事はできなかった。お茶で目をいためたため、お茶を作る事も禁止されていた。

二つの神社とも、水火を防ぐ神、及び農業、養蚕の神として、氏子の崇敬が深かった。

明治維進前迄一年に一回盛大な大相撲を行って二神の祭事を催したという。

今でも石尊講に相撲が行われている。河原に相撲とり場の地名があるのもそのためであろう。

常永寺の床下には、相撲場の四本柱が、現在も保存されている。

お日待には愛宕神社から八尾神社の間の、約千メートルに及ぶ長い距離に燈籠が点火される。

小泉の馬鹿燈籠と、他村の人に言われるほどたくさんの燈籠が灯された。

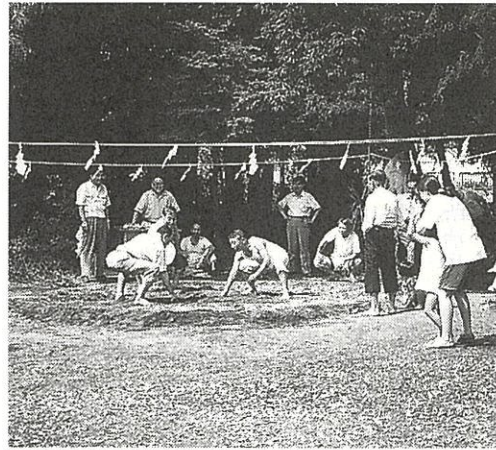
今でも十月二十三日のお日待には、燈籠をたてる風習が引きつがれている。

二社はその後、明治四十三年四月二十八日、南市田神社に合併され今日に至っている。

(熊谷市久下地区に北市田の地名があるので、
南市田と命名した。)

今でも愛宕神社は、京都の愛宕山山頂に鎮座する
愛宕神社で火防の神として信仰されている。

祭神は愛宕神社(軻遇突如命) 八尾神社(倉稲
魂命)である。



(八) 石 宮

昔、うま年とひつじ年の二年続けて、水害に遇
い土手が切れたので、村人は石でお宮を造り水神
様を祀った。

現在も荒川産業株式会社の坂の下に碑が建っ
ている。

碑文には文久三年(一八六三)と記されている。



(九) 力士、『風呂桶山』

手島は、相撲の盛んな所だった。明治二年(一
八六九)頃が全盛期で、広い堤外に辻を作って皆
が草相撲をとった。今でも堤外に相撲とり場と言
う地名が残っている。その頃力士が各地から来た
ので村の人は力士を宿泊させた。

たまたま、上手島の関根義治さんの宅でも三代
前のお爺さんの頃泊めたという。

大力士なので木の香も新しい風呂桶を新調して、
「家の風呂は立派な風呂だ」と力士の前で大自慢
をした。ところが力士の方ではこの鼻高々の自慢
が少し癪にさわつたらしく、一つじいさんの高い
鼻を折ってやろうと意地悪を考えた。威勢よく風
呂に入り、ドスン! ドスン! 風呂桶の中で四股を
踏んだ。

たちまちポカリと風呂桶の底が抜けてしまった。これを見ていたじいさんも負けてはいなかった。大声を上げて『只今の勝負風呂桶山の負け』と、言ったのでさすがの力士もじいさんの頭のいいのにあいた口がふさがらなかったという。

(十)八木節笠踊り

八木節笠踊りは明治時代以前から続いていたもので、群馬県から師匠を招き教わったものではないかと伝えられている。

その後、明治三十年頃は剣舞奨励の国策に沿って踊りも剣舞風に変っていった。

日露戦争大勝利の凱旋の勇士を迎えるに当り再び威勢の良い八木節となった。

全盛時代の大正初期には遊芸出稼ぎ許可をとり

秩父地方にもでかけ、興業を行ったといわれている。その後、時代と共に変遷し、一時中止されたが昭和の初め頃又復興し随分有名になった。

昭和二十年日本敗戦の混乱で、踊りどころか食糧供出に追われ姿を消した。世の中が安定してくると手島に古くから伝わっていた尊い芸能の火を消すのが上がってきた。

こうした中から昭和四十八年に「手島地区郷土芸能八木節笠踊り保存会」が生まれ初代会長関根義治さんらの手に依って再び伝統が世に浮びあがってきた。

現在では「手島楽友会」と改名し、新井清会長以下五十六世帯が加入している。

踊りは雪おろしと呼ばれる。スゲ笠、カラ笠、扇、二ツ輪、大輪棒を使う踊りに分かれ、それぞれ四人で踊る。曲は上州の八木節と同じだが歌詞

が違いそれぞれの踊りは、振り付けも全部違う。おはやしは四斗ダ、大皮鼓、横笛、スリ鐘各一人ずつの計四人、つまりおはやしと踊りで八人の一チームとなっている。このうち残念ながら棒踊りは現在行われていない。

(十一)手島の八幡様

手島の金井義雄さん宅の裏、元の切れ所の付近でのことだった。義雄さんの数代前の人の頃麦刈りでいそがしい時期に、夕方女中が小便をした。すると見る見るうちに女中が気狂いのようになってしまった。そこで占い師に何のあたりだろうと思って見てもらった。『ここには、神様が居るのだ。神様に不吉なことをしたので神様がお怒りになったのだ』と言った。

早速その場所を掘り下げてみたら長さ六十センチメートル（約二尺）たらず、笛のような形の石が出て来た。この石がきつと神様であろうと思っておまつりした。

この話は義雄さんの祖父、兼次郎さんが八幡様の由来として熊谷の書家三浦先生に書いてもらいその家の宝として軸に作って保存してあります。その後いたんだので先代の肇さんが九一三字にかいて明治四十三年五月十日堤外にまつった。

原文は漢文なのでこれをわかるような文に直して世の人に知らせたいと義雄さんは話している。今、一部を字の氏神へ祀り残りを南市田神社へおまつりしてある。

第三分団（屈戸、津田新田、天水）

（一）養子に行つた観音様とすのこ橋

屈戸の墓地はもと保全寺地内に在つたが、当時の寺の坊さんが生ぐさ坊主で、寺の過去帳を質に入れて吞んでしまつたり、遂に寺迄売り飛ばし、とうとう寺を廃止する事になつた。

屈戸の壇家一同は、そんな所に大切な墓地は置けないと、屈戸地内の堂山という所に墓地を移した。

この所に古い観音堂が在つたが、保全寺からこの地に墓地を移すのにどうしてもこの堂が有つては、墓地が出来ない。

そこで相談して、観音様を上岡観音に養子にやる事にきまりました。

残っています。

（二）たたくと女の音色を出す半鐘

屈戸には、今でも残る田口家と言う大地主がありますが、天保年間に現在の熊谷市上之から婿養子に來た田口松次郎と言う人が村の名主を務めていました。

たまたまこの人が、川越藩の御用の為馬に乗つて出かけた、その留守に屈戸に大火が起り、田口家も丸焼けになつた。その事を一刻も早く川越藩に行つてゐる名主に伝える為、これも早馬で飛んで行つた。

丁度松山で歸りの名主に出合い、屈戸の大火を伝えるとこの名主様びっくり仰天し馬からころげ落ちてしまつた。

当時米一駄（二俵）と酒二斗を持参金として、村中総出で、観音様を吉野川の北側までお送りして行つた。

上岡側も大よろこびで、やはり吉野川の南側までお迎えに出た。

川に粗末な土橋がかかつていたが、観音様がこの橋を渡るのに御足をよごしては申し訳けないと、大急ぎで太い竹のすのこを作り、橋の上に敷きつめて観音様をお迎えしたので、今でもこの橋はすのこ橋と称して立派に改築されている。

さて、この観音様は男振りが良くて、少々格が上だったので、上岡観音はそれから急に盛り出したとの事で、其の後長い年月が過ぎても、屈戸の人々は養子にやつた観音様の徳をしたつて、上岡に会いに行くので、屈戸から中曽根沼黒耕地を経て、上岡に通ずる野中の近道は観音道と言う名が

この名主の奥方は婦古様と言う名前の後妻だったが、東松山の娘で男勝りの氣丈で、この話を聞いて名主たる者が火事の知らせに驚いて、馬からころげ落ちるとは何たる事だ、再びこのような事があつては恥さらしになると、それには火の用心が第一と考え大事にしていた持参金と、こうがい（かんざし）まで売り払つて大金を作り、竜吐水（ポンプの一種）から火消し道具一切と特別注文の半鐘まで、一切婦古様一人の自費で用意して、火の用心を続けた。

その一念から婦古様の霊がこの半鐘に乗り移り婦古様の死後もこの半鐘をたたくと、どこかやさしい女の声のような音を出すようになってしまつたとかで、この半鐘は火の用心の守り神として、田口家に大切に保存されていましたが、この半鐘を屈戸の火伏せの守りになるようにと、田口家が

ら借り受けて、現在でもポンプ小屋のそばの火の見につるし、非常の際に利用されているとのことである。

(三) お行人さま

現在の津田新田部落の上分で、荒川堤防下に『お行人さま』と、呼ばれるコケの生えた古い四角の石塔が立っている。村人は時折りこの石塔に手を合わせお供え物などしている。

このお行人さまについては、昔、どこからともなく常青という行者が津田新田にやってきた。

今の大曲の堤防が大雨の為、決壊の寸前に追いかまれた。困り果てた村人の姿を見た常青は、村の人を救おうと考え「それでは私が人柱になる」と言って、自ら濁流の中に飛び込み消えてしま

ました。

その後は、どんな大降りでも堤がきれなくなった事はお行人さまの靈魂が、今でもこの地点の堤防を守っていてくれる為であると村の人は皆信じるようになった。今残っている石塔に保全十一代、沢応代立寛永十九年（一六四二、午）五月十五日とある、推察するにこの日が常青の入水の日と思われる。

津田新田施主松本太左エ門、天保七年（一八三六、申）三月造之、世話人村中とあり、その時代が偲ばれる。

命を捧げて村を救った常青行者に深く感謝の意をこめて建立したものだと思われる。

(四) 常陸ばあさん

ひたち

常陸ばあさんが金比羅さまに祀ってある。

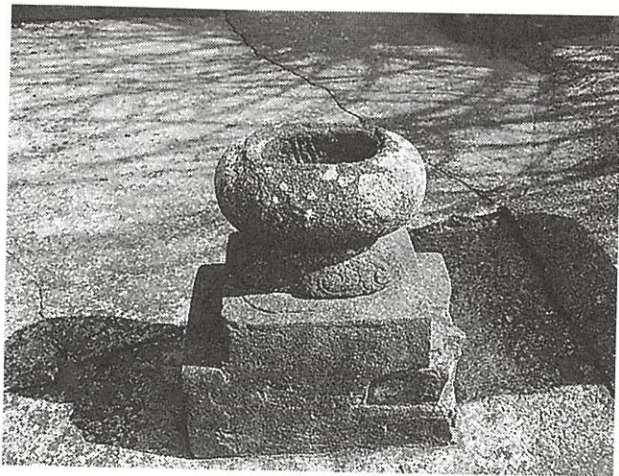
下の病の神様で、着物を着ているが尻が丸出しである、村の人は線香を立てて、尻をなぜるとごりやくがあるというので、昔は大変さかったということである。

(五) 市田太郎

「松の木の下」という所が、今の津田新田上町一番地にある。

これは市田太郎が、城を三十間沼（屈戸の堤の北で、しばらく沼でしたが今は埋め立て地）の所に構築し、城の前方には松の木があった。

よそから使者になった武士が、松の木に馬をつ



常陸ばあさんの台座

ないで市田太郎に遇った。

その後そこに三軒家があったので、別名三軒屋とも言われる。市田太郎が久下直光と石合戦などをしたと言われる。



毎年四月十九日にある祭事だが、三百年前頃、厄病神、はやり病いの防止の為、行ったものといわれる。

獅子は北埼玉郡の騎西町の玉敷神社より、借り厄病退散の願いをこめて全戸をまわったが、今では一晩中宿の家に供えてご馳走をいただきながら祀っている。

又、心ある人はお獅子へおまいりに来る。

昔はお獅子の踊りで村中賑わったが、今では踊りも約十年前より廃止され、宿の家での行事となってしまった。

(六)おしっさま

おしっさま

(七)天水のむかしむかし

天水は荒川土手^{ども}の下に、上から下まで十六戸が一列にきちんとならんでいる、こんな行儀よい集落はめづらしい。

天水は其の昔、北岸の新川（江川）の一部だとか、屈戸の分れだとか、言い伝えられているが、未だにはっきりとした事は分っていない。

天水は昔から荒川べりの集落で、井戸を堀らず生活一切は全部荒川の水で生命をつないで来た。昔から荒川を利用して、物資の運搬をするために幾つもの舟着場（河岸^{かし}）があるが、天水河岸は江戸からの終点で、これより上流には河岸と名のつく所はない。

天水の人々は、全部が船頭と言ってよい位舟が生命の綱だった。

上流は押切附近まで舟で行き、石垣用の玉石を運んで来た。

又、江戸からワタ樽と言う魚の切り屑を樽につめた肥料を運んで売った、農家は競ってこのワタ樽を唯一の肥料として利用したのが、大正末期まで続いた。やがて天水も其のなつかしい土地とお別れの日が来た。

荒川の河川大改修が実施され、堤内に家を次々と移したのが現在の天水で、昭和十六年から昭和十九年の間に全部の移住を終り、昔のままの順序で一列にきちんと並んでいる。

天水と対岸新川（旧江川）とは、天水渡しを利用して交通したのが長い間続いた。

大正末期から、昭和の初め頃は舟賃片道二銭往復三銭だった。

天水の人が当番制で順々に毎日出役して、船頭

役を務めるのが義務だった。

それが昭和二十五年頃まで続いたが、天水渡しに仮り橋が出来たり、上流久下渡しに冠水橋が出来たりしたので、いつとはなしに何百年も続いた天水渡しに終りを告げてしまったが、当時の船頭小屋跡がなつかしい思い出を残して、今でも残っている。

其の船頭小屋から二〇〇メートル南方に大きな森があり、そこにさいかちいなりと呼ばれる稲荷神社が有ったが、明治の合社令により、今の南市田神社に合社され、後に天神様が残されたが移転が全部終わった時に、この天神様をお迎えして、新堤防の下に祀り毎年二月二十五日天神祭が行われ、なつかしい天水の昔が偲ばれる。

第四分団（中曽根、吉所敷、沼黒、高本）

（一）高城神社と高本の地名

武蔵の国高木村に古い昔から高城大明神が祭られていた。祭神は高皇産靈神で朝廷に最も縁の深い神社である。昔日本武尊東国征伐の折この宮に祈願し伊勢河岸より乗船され、又坂上田村麿も東征の折武運長久を祈願されたと言ひ伝えられている。我が国でも最古の社で醍醐天皇（八九八―九三〇）の三十二年間を延喜式と言ひ朝廷の儀式作法の規定に依り建てられた誠に由緒深い神社である。最初の社は高木村字中街に建立されていた。荒川流域の変遷で社が流され高木村の南端、五郎の宮と呼ばれる所に漂着した。神意を尊重し其の後長い間この地に祭られていた。

時代がだんだん進んで尊皇、讓夷がやかましくなった頃大政奉還のきざしが益々濃くなった頃朝廷にご縁の深い高木神社の調査の役人が高木村に派遣されて来た。氏子一同は「そんなむづかしい事で国幣社にでもされたら維持管理に大変な金がかかって村が困る」と思い高木村の木の字に素早く一本入れて、高木を高本にしまいこころは高本村だ、高木村ではない、他を調べて下さいと役人を帰らせてしまった。それから現在の高本になったものだと言ひ伝えられている。

尚、この神社の延喜式を証明する古鈴が今でも大切に保存されている。

現在の高城神社は和田吉野川改修工事の為、氏子の総意に依り最初建てられた中街に移された。

この高城神社の変遷についての貴重な詳しい文献が（高本の宮崎和一氏宅）に保存されている。

(二) たんぎくどん

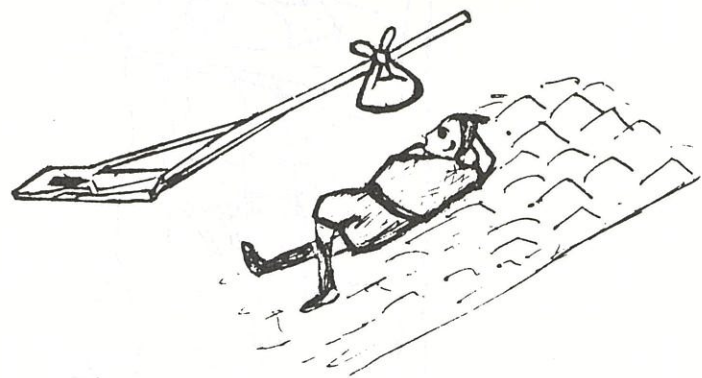
これは余り古い時代の話ではない。現在の大字中曽根にたんぎくどんと言う人が住んでいた。

とても立派な体をしていて体力も強く頓知にとんだ珍人奇人といった人だった。

今でも中曽根にたんぎく屋敷跡が残っているからほんとうの話と思われる。

この人が村の農家にたのまれて奉公にいつている時の話である。

その奉公先は向谷の長兵衛さんや津田新田の山椒大尽等で働いたと伝えられている。このたんぎくどんにまつわる話は数多く言い伝えられています、其の主なるものを幾つか掲げる。



ア、弁当が仕事をする話

ある朝、たんぎくどんが大きな弁当を持って野良仕事に出かけようとすると、おかみさんが「弁当が仕事をするんだからいっぱい持っていきなさい」と言った。

たんぎくどんは「はい」と返事をし野良仕事に出掛けた。たんぎくどんは朝、野良に着くとすぐに柄杓（田畑を堀り起す柄の長い農具）へ弁当を縛り畔道にむしろを敷き寝てしまった。夕方になり家へ帰るとおかみさんが「たんぎくどん、今日はどのくらい耕したかね」と聞いたので、たんぎくどんは「私は知らないから、弁当に聞いて下さい」と答えたという。



イ、縄ないの話

ある夜、旦那様が夜業^{よな}仕事をさせたくて稲藁を
いっぱい打って「たんぎくどん、今夜はこの稲藁
で縄をなっておいてくれ」と命じた。

たんぎくどんはいやになっちゃうなと思いが

ら縄をない始めた。

藁が多いので全部終るのは真夜中になってしま
った。便所に起きたおかみさんがこのたくさん出
来た縄を見てびっくりして「たんぎくどん今夜は
ずいぶんたくさん縄をなったね。御苦労さん、も
うおしまいにしてお湯に入って馬に喰わせたらお
休みなさい」と言った。

たんぎくどんは湯に入り馬に喰わせて寝ました。
翌朝旦那が「夕べ縄ないを頼んだけれどもどこへ
しまつてあるんだい」とたんぎくどんに聞いた。
たんぎくどんは「どこへしまつたかおかみさんに
聞いて下さい」と言った。こんどはおかみさんに
「お前が知っているというがどこへしまつた」と
聞いたが「どこへしまつたか知りません」と答え
た。おかみさんが「たんぎくどん、どこへしまつ
たんだね」と聞くと「おかみさんが夕べ湯に入っ

て馬に喰わせて寝ても良いと言つたので馬に縄を
喰わせて寝ました」と、答えた。驚いて馬屋を見
るとたくさんさんの縄が馬に喰いちぎられていたとい
います。

ウ、たんぎくどんのお使い

ある夜、旦那さんが「明日の朝早く小川へ行つ
て来てくれ」と頼んで寝た。

たんぎくどんも「はい」と返事をして寝た。

翌朝旦那様が早起きをしてたんぎくどんを呼ん
で用事を頼もうとするとたんぎくどんは平気な顔
で「はい、小川は遠いので早起きして出かけ、只
今帰つたところです。小川の町はまだ皆寝てまし
たよ」と答えたという。



エ、青麦を刈るたんぎくどん

旧暦ではうるうの年（うるうの年は同じ月が二
回続く）があった。

その年は五月が二回続く年でした。そのため五
月の節句に二回遊ばれては困るので旦那が「我が

家は代々家例として五月の節句に麦を刈ってしまったうのがならわしだ」と言ってお節句でも遊ばせず麦を刈らせた。

その翌年の五月の節句の朝でした。家の人はたんぎくどんの奴、朝早くからどこへ行ったのだろうと思ひながら朝飯を食べていた。

そこへ馬にまだ熟さない青い麦をいっぱい積んでたんぎくどんが帰つて来た。

たんぎくどんは「おめでとうございます。ご当家は五月の節句に麦を刈る家例だそうですので今朝早く起きて麦を刈ってきました」と言つた。

旦那はあつ／又、たんぎくどんにやられたと思つたが後の祭り、昨年お節句を遊ばせずに麦を刈らせてあるので仕方がない「それではご苦労さん、その馬に乗せてあるだけ刈つたのか」と聞いたところが「家例だそうですので四反五畝全部麦を刈

ました。

ああくたびれた／今度はもつと近い所にして下さい」とたんぎくどんは答えた。

カ、休みながらの溜かえ

ある日のお昼休みにおかみさんが「たんぎくお昼を食つたら休みながら溜をかえて下さい」と命じた。

たんぎくどんは食事を済ませ溜池の端へむしろを敷き頼づいついて横になり小さな柄杓でピシャコンピシャコン、あたり一面台所の方まで水だらけとなつてしまつた。

そこへおかみさんがとんで来てたんぎくどん何をしている、これでは水だらけで仕方がないではないか止めろ止めろと叱つた。たんぎくどんはおか

つてしまいました」との答えに旦那さんはほんとうに麦のように真青になつてしまつた。

それもそのはずこの年はうるうがないので麦はまだ真青でやつと穂が出たばかりだつた。

オ、岡での小用の話

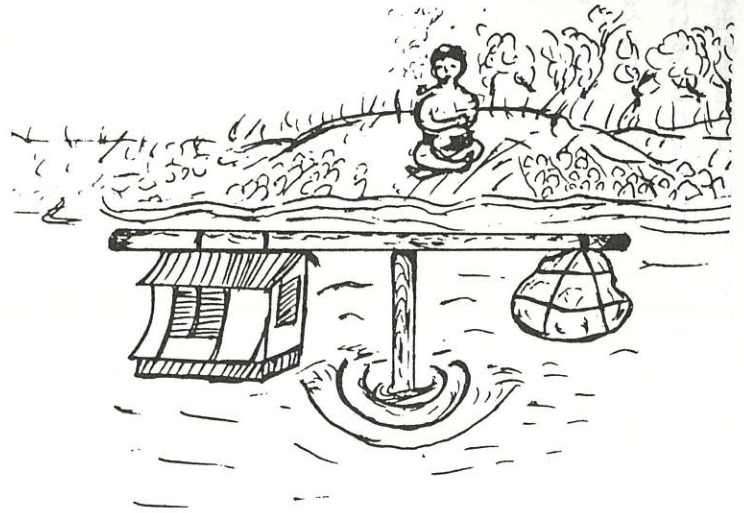
ある日、田んぼで田の草取りをしていた。小用を足そうとすると、旦那が「ここでやらないで丘へ上つてやつて来い」と叱つた、「ハイ」と答えてノコノコと田んぼから飛び出して夕方まで戻つて来なかつた。旦那が「今頃までどこへ行つて来たのだ」と聞いたたら「旦那さんが岡へ上つてやれと叱りましたから上岡（東松山市大字岡）へ行つて用を足そうとしたら人が大勢いて、はづかしいので下岡まで行つてやつと小用を足して今もどり

みさんをにらみつけて「休みながら溜を替えろと言つたのはおかみさんではないですか」と大声でやり返した。

キ、あぶない／杭に支えられた旦那

ある日旦那様が「たんぎくどんは二人前食べるのだからお駕籠を一人で担いで私を熊谷まで乗せてくれ」と命じた。

仕方なくたんぎくどんは天秤棒に片方は駕籠を付け片方には石を下げ旦那を乗せた。久下の橋の頃が一番流れの強い所まで来たところで「旦那様一休みしてもよろしいでしょうか。」と聞いた。旦那は「よい」と答えた。たんぎくどんは川の中に杭が一本打つてあるのを見つけた。かつぎ棒を杭の先端にそのままそつとひっかけてお駕籠を宙吊



りにしてしまった。

駕籠は川風にフラフラゆれて今にもドンと川に落ちそうだった。「これこれ、これではあぶないではないか」とガタガタふるえ出してしまった。

たんぎくどんは「一人でかついで来たんだから杭に頼むより方法がない、まあ下で泳いでいる魚でもながめてゆつくり休んで下さい」と、平気な顔で自分は河原の石に腰をおろし、煙草をパクリパクリふかして休んでいた。

旦那は一人でかついで来させたので仕方なく宙づりの駕籠の中でガタガタふるえていた。

ク、石うすとたんぎくどん

ある夜、たんぎくどんがよなべ仕事に石うすで粉挽きをしていました、主人が「たんぎくや明日

も続いて石うすを挽いて、後は松山へ行つて来てくれ」と言いました。つむじ曲りのたんぎくどんは用事も聞かず、次の朝早起きをして石うすに引綱をつけ、腰にしぱりつけてずると引いて、

ハアハア大汗をふきふき松山迄行つて来て「旦那様こんな骨の折れる事は二度とさせないで下さい腰が痛くて仕事が出来ません」と、三日も仕事せず高いびきで寝込んでいたとき。

(三) こわいお不動様

中曽根の金胎寺に不動様がまつられている。

この佛像を修理したり又勝手に移動したりうっかり手をつけた人は近いうちに必ず死ぬと言ひ伝えられていたが、うそかほんとうか全く信じられなかった。最近になってほんとうにそんな事が起っ

た。この不動様を修理した熊谷の佛像師をはじめ字内でも思い当る出来事が次々と起つたので、今では魔のように恐れられ誰も近づかなくなっている。

(四) くろふだ稲荷

昔、吉所敷字三本木地内に黒札いなりというお宮があり、大変さかった。何かにとりつかれた時おまいりをしてお姿をかり床の間にあげて拝むととりつかれた者が立ちどころに正気にもどつたと言ふ。このご利益にありつこうと特に忍領行田方面からの参拝者が多く一時は茶店まで出たと言ひ伝えられている。

今では黒札いなり跡とご神体や黒札を作った原版などが残っているのでありし昔が偲ばれる。

(五) 息障院のお墨付き

沼黒山正福寺壇家に神葬祭が導入され寺が取りつぶされようとした。

当時吉所敷全部十九戸と沼黒の一部の人が何が何でも先祖代々の寺を護ろうと決議して稲刈り鎌を腰にはさんで全員本堂に座り込んだ。寺を取りつぶすなら壇家全員ご本尊の前でこの鎌で腹かき切ってご先祖におわびすると今にも腹をかつ切らなばかりの勢であった。

さあ一大事と御所の息障院に早馬が飛び息障院大僧正様が早駕籠でかけつけやっとりしづめた。決死の覚悟で寺を守った功績に対し吉所敷十九戸全部と沼黒の一部の壇家に永久に居士、大姉を賜うと言うお墨付が下附された。

これが現在でも守りつがれて当時からつく吉所

敷十九戸と沼黒の一部の壇家には居士、大姉が無料で授けられている。

『爾今、居士、大姉を賜う』と、いうお墨付は今でも両字に保存されている。

(現在のお寺は当時の庫裡^{くら}です。当時の本堂は火災にあってありません。)

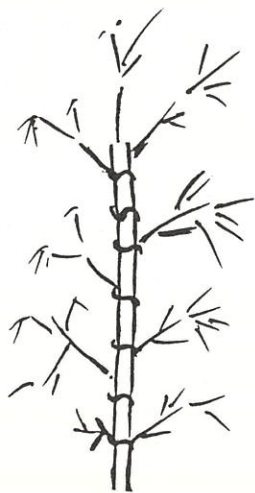
(六) 藩行跡

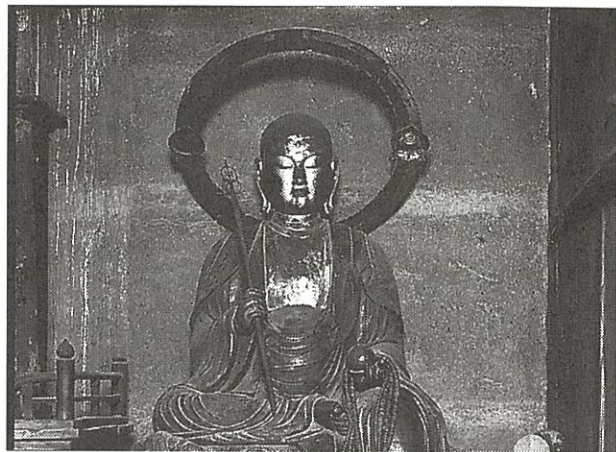
吉所敷の消防小屋の所に昔川越藩の藩行があったといわれる。

藩行とは藩行政に必要な制札及び処刑者の氏名等を掲示する大事な場所だった。

明治の終り頃まで建物が残っていた。雨の日など子供の遊び場所となり建物は五寸柱が四本立ち屋根は瓦で葺いてあった、又、吉所敷地内には川

越藩の年貢米の貯蔵所お蔵屋敷などが有った所と言ひ伝えられている。





いばとり地藏尊

(七) いばとり地藏

沼黒山正福寺に地藏尊が安置されている。

高さ一米六十位の大地蔵尊で金色に輝いている。

(国宝に指定される様な価値のある立派なもの
と聞いている。)昔から沼黒の疣とり地藏と言っ
て大変有名である。

『私のいばをもぎって下さい』と、拝むと地藏を
作った人の念力の執念が通じるのか必ずいばがと
れたという。

東京巢鴨のトゲ抜き地藏と共に武州沼黒のいば
取り地藏は関東一円に信者が多かったと言いつた
られている。

(八) のんきな信さんとかみそり縄

現在の高本に、信さんという至ってのんきな人
が住んでいた。生れつき縄ないはとても上手な人
だが頭の方は少しお目出たかつたらしい。こんな
話が残されている。

ある日熊谷に縄を売りに行った。家を出る時、
お父さんが「お前の縄は上出来だから五貫には売
れるぞ必ず五貫(一貫とは十銭)で売ってこいよ」
と命じた。(その頃の縄の荷作り五十房づつま
るくたばねて大束にした、その束が二つで百房、こ
れを単位にして売り買いが行われた。)信さんがこ
の縄を天びん棒でかついで熊谷に着いた。

よい縄なので買手の方がすぐ六貫に値をつけた、
信さんは「だめだめ」と首を横に振った。「それ
では七貫でどうだ」と言うと言信さんは又、首を横

に振った。「それではいくらなら売ってくれるん
だ」と聞いたところ、信さんは「五貫なら売る。
五貫でなければ売らないぞ」と言った。買手の方
はにっこり笑って「よし五貫出すべえ。」信さんは
五貫で売って鼻高々と帰って来た。

家に帰ってお父さんが「五貫で売れたか」と聞い
た。信さんは大いばりで「買手が七貫で売れ売れ
といったがだまされずに五貫で売って来たよ」と
言った。お父さんが「この馬鹿野郎それは二貫も
安売りだ」と、怒り信さんは目から火の出る程げ
んこつ玉を喰はされた。

又、その頃の高本部落は常習水害地なので毎年の
ように水害を受けた。せめて藁だけでも生かさう
とどの家も縄をなって売り生活の足しにしていた。

高本縄はかみそり縄と言う愛称で呼ばれていた。
それは良く切れるからだ。

それでも縄の産地として有名で買手が随分入り込んで来たという。昔の人の苦勞が忍ばれる。

こんな唄が今でも残っています。『一房五厘（一円の二百分の一）の縄ないしても主さん一人はたて過す。』

(九)うりの産地

江戸末期から明治の中頃までの間沼黒はまくわうりの大産地だった。質も良く味も良く『沼黒うり』として、各地の市場でひっぱりだこだった。

所が『ギリウヂ』という害虫の大発生を受け遂に絶滅してしまった。



(十)鶉にだまされた信さん

のんきな信さんにこんな話が残っている。

その頃辻切りが流行し、あちらでもこちらでも辻切りにやられた話が絶えなかった。

ある時、信さんが夜おそく村はづれの杉の木の大木の下を通るとギヤアノと一かつ額を冷たいものが走った。

信さん『やられたなあ』と悲鳴をあげ腰を抜かしてしまった。六尺ふんどしをはずし頭をぐるぐる巻きにして家まで這って帰った。うんうんうなつて三日も吞まず喰わずで寝込んでしまった。

近所の人々が心配して「信さん、どの位切られたのか傷口を見たらどうかね」と言われて、頭に巻いた六尺ふんどしを取って見た。何と白い鶉のくそがからからにはりついていていた。

「信さんこれは鶉のくそだ。どこも切られていないじゃあないか」と言った。信さんは平気な顔で「あ、そうかどうか血が出ないからおかしいと思った、くそいまいましい。」と言ったという。

(十一)十日前（稲荷）

昔高本の北の方に竹山があった。その中に竹の内稲荷と言う祠があった、お稲荷様がまつてあった。その前の方の土地をお稲荷前と言った。

それがいつとはなしに稲荷（トウカ）が十日前と言う地名になって今日残されている。

今では竹やぶも整理され、ご神体だった、古い石が鈴木賀一さんの屋敷内に移されている。

(十二)通殿川

昔、中曽根に吉野通殿という人が居た。

慶応年間に排水路を掘り、大変な犠牲を払ってこの川を完成した。村人は、その徳をたたえ通殿川と呼ぶようになったという。

(三)墓地の二重掘り

地藏院という立派な寺が有った頃、沼黒の墓地は下岡（今の東松山市岡）の高台にあった。

他村の墓地のある事を嫌った下岡の人が邪魔にして下岡地内の地獄谷という所に一夜の内に石塔をうづめてしまった。

その後やむを得ず沼黒地内に墓地を作ったが、低地の為穴をほると水が出てしまう。

佛様を水の穴に葬るのは申し訳ないと考えた村人は土を運んで一米位墓地に盛り土をした。それが現在の墓地になっている。

だが、死者が出た時大役に当ったお方は大変な骨折りをしなければならぬ。沼黒墓地の二重掘りと言われ一メートル位掘ると其の下に盛り土前の墓地にぶつかる。

古い時代の棺桶が残っているのでこれを掘り出さなければ新しい佛様を埋葬することができない。大役に当った方はほんとうに大変な仕事であった。

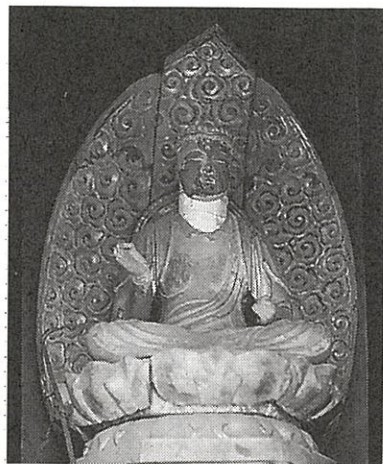
(四)不思議な観音像

中曽根大日堂の西側に、十一面観音がまつられている。

この観音像は、木彫り観音で水にはすぐ浮く筈なのに不思議や不思議、十一面観音像は水につかると石よりも重くなって絶対に動かない。過去数回の水害に司^{はつか}は流失しても、水に浮く筈の観音像だけは、でんとして動揺もせず鎮座ましまして

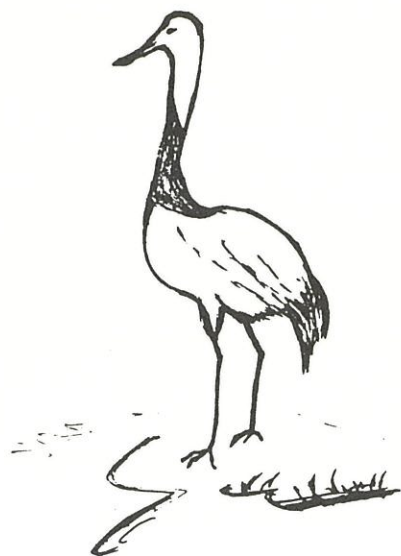
いる。
去る昭和十三年九月一日の大里村小泉の荒川堤防決潰の大洪水の時も祠は跡形もなく流失したが、

観音像だけは、きちんとして微動もせずそこに残っていました。誠に有難い木製像でありながら水に浮かない不思議な観音像として、地元民の信仰が厚く毎年十月十七日を縁日として、あがめられている。



十一面観音像

第五分団（津田・向谷）



（一）一本橋と鷹匠湯

一本橋は其の昔、忍の城主の鷹狩りの時、落した鷹を川向うに渡って拾いにゆくために作られた。お正月には殿様に鶴の肉を献上する例になっていたので、正月間近になるとお鷹匠やおえさ役（飼育係）が来て、大変立派な鷹狩りを行ったという。このお鷹匠は大変に威張って、村の庄家や名主の家に泊った。

お鷹匠らは野原を歩いてくるので体が冷えきっていた。お風呂に入る時は、ぬるい湯でも熱く感じる。そのため初めはぬるい湯から入っても、すぐ焚け、焚けと命じた。熱くなると、うめろ／うめろ／と、威張ったという。

そこで、今でもぬるい風呂に入ってすぐ火を焚かせる事を『鷹匠湯』と言い伝えられている。

（二）一本橋の水騒動

津田向谷は用水なき水害地とされていた。

寛永年間に水不足の事故があったと、津田の中島作次郎氏所蔵の古文書に記されている。

中島さんは将来の事を考えて、大正八年水源を通殿川より求めた。

堰も土で作っていたものから木製となり、現在ではコンクリートになったと記念碑に記されている。

昭和八年六月二十八日の夕方、この通殿川の水を唯一の農業用水としていた。

吉見町（旧東西南北の四ヶ村）の人達五百人余りがここに堰を作られたのでは下流に水が来なくなる。これは重大な事だといって、取入口の土俵をこわしに大挙襲来した。

この時の様子は昼間のうちから、あるいは草刈

りの風をし、ある者は水廻りの風をし、二、三人位ずつに分かれて、地元の人に気付かれない様に向谷堰へ集まり、堰を切ろうとした。地元の有志は切らせまいと頑張った。

熊谷や東松山から沢山の警官が動員され、県会議員もこの急報に接し飛んで来た。

津田向谷では、半鐘を乱打し『一本橋が火事だ！火事だ！』と、村中の男が手に手に鎌、万能、長柄の鎌など振りかざしてかけつけて来た。

あわや流血の大乱闘が一触即発となった。警官隊の必死の説得で両方から代表者を出し、大里郡吉見村役場会議室で円満に話し合う事にした。

殺気立った大勢を一先づ解散させた。その後、数回に互り両者話し合いの結果円満に解決して今日に至っているが、今でも一本橋の水騒動として語られている。

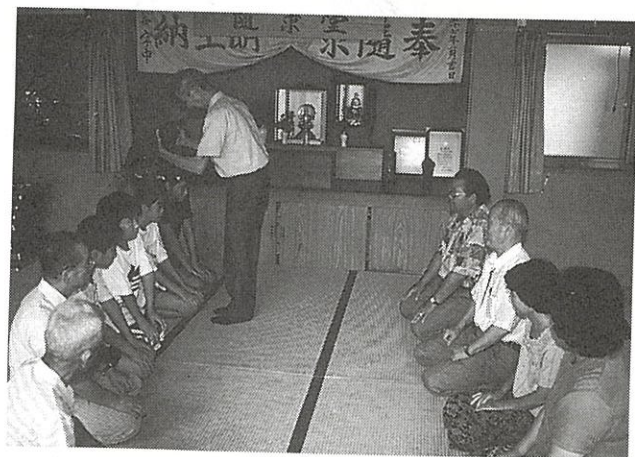
永久に語り伝えられて行く事でしょう。

(三)八幡様

津田と向谷に各々一つずつ八幡様があった。
向谷の八幡様の古い額には「八幡皇大神宮」津田の八幡様の昔の額には「八幡大神宮」とあり、今でも残っている。

皇太神宮と言う文字のつく珍しい社名だったが、この両社は、大正時代に合祀され現在「おすわ様」の近くへ移されている。

道路改修工事の時、旧社跡から瓦や青石塔婆、（凡字石板）等が出土し、在りし昔を偲ぶ貴重な資料が発見された。



百万べんの数珠

(四)百万べんの数珠

向谷の随求堂（ミナモト）にこの数珠がある。随求堂の祭神は「随求明王」といわれる。

近くに墓地があり、三月十五日には随求明王の百万遍の数珠を、村の若い衆が総出でかついで、村中を悪魔払いとしてねり歩いた。

長さ八メートル余りもあり、芯はもめん布をより合せて作ってある珍らしく大きな数珠である。

今もこの祭りは、昔のまま残っている。

春祭りには、村内の各戸から魚一匹と一重箱ずつのご馳走を持ち寄り、これを交換し合ってたべながら御神酒を汲み交して、村内の無事平穏を祈る。『おなかの神様』で、腹痛の時は、随求様を拝むと奇妙にどんな烈しい腹痛も全治したという。

(五)馬頭観音堂

津田に観音堂というお堂がある。この観音堂は昔福田村（今の滑川村）にあった。

福田観音の改築の時、旧堂を譲り受けたものである。津田へ移転する時、建物を丁寧にこわして、運んで来た。

有り難いお堂の用材なので、一本でも土をつけてはもったいないと、村中総出で何か月もかかって、一本一本全部肩でかついで運んだと言い伝えられている。

農耕馬の守り神として、尊敬され近郷近在より馬を引きつれた人たちが、おまいりに来て大変なにぎわいだった。

この祭事は毎年二月十九日に行われ、昭和二十年頃まで続いていた。

農村に牛馬がいなくなったので、今では祭礼だけ行われている。

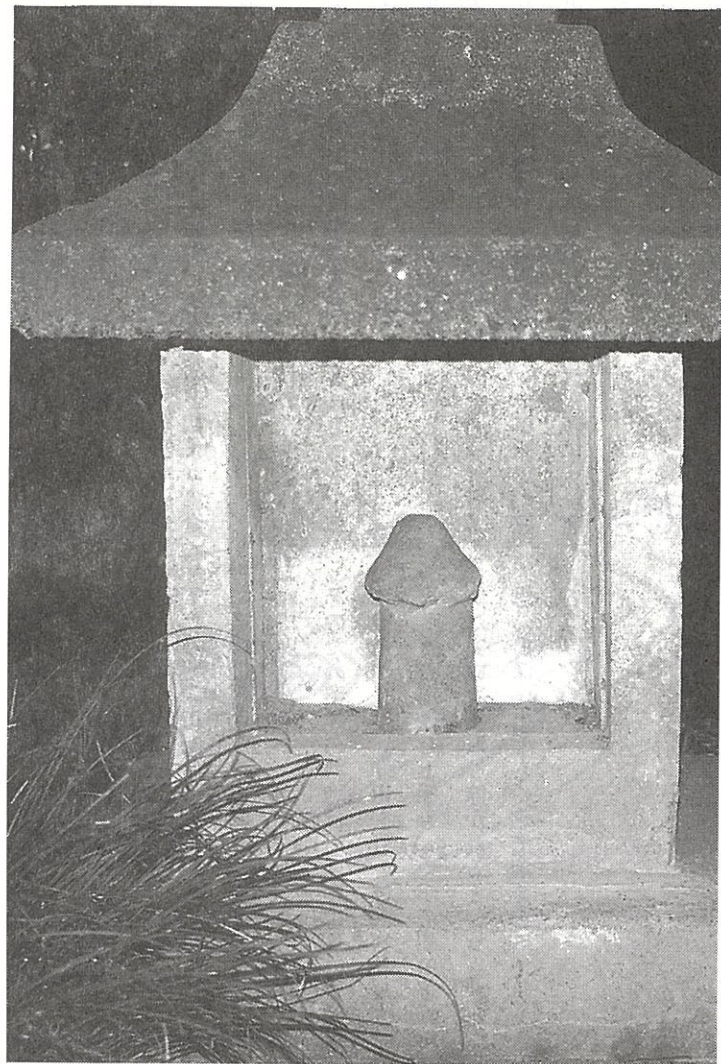


(六)根精様

津田のお稲荷様に根精様と言う奇妙な神様がまつられている。

これは男の象徴である。男根の形をしている。夜の丑の刻に、根精様を抱くと子供が生れると言う。

子供の生れない婦人は、そつとおまいりして、四辺を見廻しぐつと根精様を抱きしめたと、言われる。



根 精 様

(七)常習水害地帯

津田向谷は土地が低く、「蛙の小便水が出る」と、近隣の町村からも評されていた。

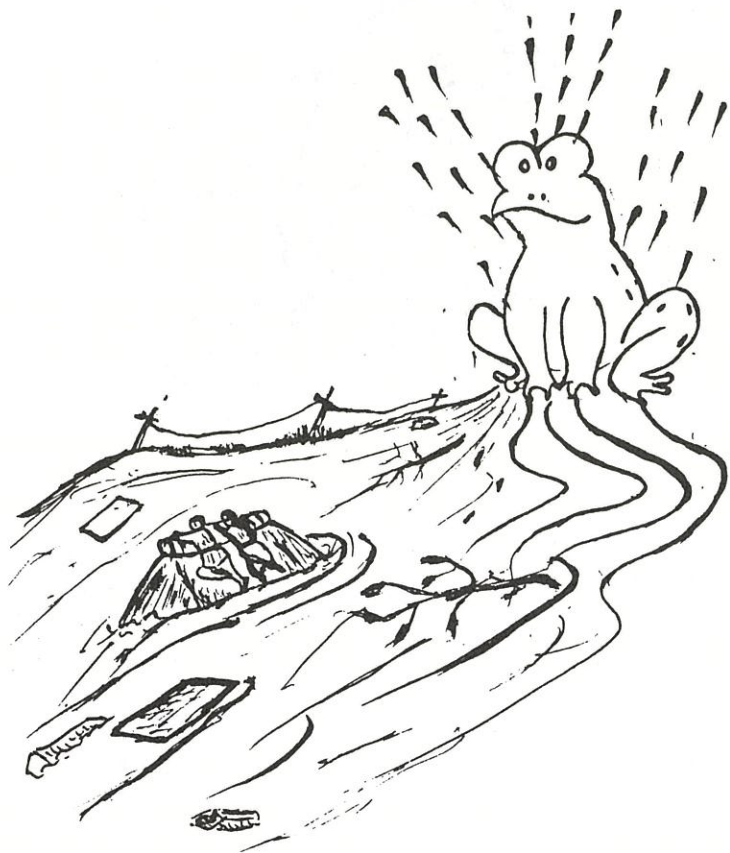
少しの雨でも排水が悪く、湧水地帯と相まって全地域水につかる事が度々ある。

明治四十三年八月九・十・十一日の大洪水は大きかった。田畑の被害は勿論、人畜にも大きな被害を与えた。

其の記念碑が平島地内に建立されている。

又、最近では昭和十三年九月一日に大洪水があった。この時は現在小泉の切れ所と、津田新田の曲堤と二ヶ所堤防が切れて、農作物は全滅の大被害を受けた。

その時は三十七名水死、建造物流失二〇〇棟と言われ凄惨被害を残した二百十日の厄日でした。



(八)沼黒の土手

現在高本前から沼黒にかけて低い土手がある。

これは、昔和田吉野川のはんらんで、水害を受けるため、津田向谷の人々が築いたものである。

当時は、土を津田向谷から運んで作ったといわれている。

そのため沼黒の耕地は、この土手により水害に合う機会が多く、津田向谷とは利害相反するに至った。この困った土手も、やがて和田吉野川の大改修が完成次第取り除かれるという。

思えば深い土手もやがて消え去って行くことであろう。



(九) 火防の稲荷

津田西町一八一の一番地にある。

伝えられるところによると昔、京都伏見稲荷大社の祭神が山上三ヶ峰におりたのが和銅四年（七一）二月十一日の初午の日だった。

この日が縁日となったが今では三月最初の午の日が祭礼日とされている。

伏見稲荷の祭神は大宮能売大神、宇迦之御魂大神、佐田彦大神、田中大神で総称して稲荷大神といわれている。

京都の伏見稲荷には天慶五年、正一位をおくられた天皇の行幸が続いた。

さて、本村の津田でも度々の水害のため古文書は流失して今はないが、口碑によると今を去る百数十年前、西明寺の時の住職秀範法印がしばしばの

伽藍の火災に困り、はるばる京都の伏見稲荷を分社として、勧請し西明寺の鎮守として祀り、火防稲荷として朝夕祈願した。

当時は境内薬師堂、南に牛頭天王社、天満宮と共に並んで社殿があった。

明治初年神佛分離令によって、現地へ移築したその後、神社の合社令（各字一社又は数社にて一社にする）により、他社は今の津田鎮守へ合祀しとりこわした。

けれども当火防稲荷はその霊徳神威をおそれた氏子が、そのとりこわしに着手することなく、現在に至っている。

そして数年前、社殿を改築し毎年三月初午には花火を高らかにあげ、余興の催しも盛大に行う。当日は遠近多数の参拝者が露店で混雑を呈し、当地方としては誠に珍しい賜わいを示している。



このお稲荷様にはこんな話がある。毎年祭礼の日には余興とし、村芝居を奉納する例しになっていた。

或る年、都合により一年この余興を中止したら、其の年に村に大変恐ろしい流行病が続発した。

これはお稲荷様のご立腹だと恐れ、それからは必ず余興を奉納し、戦時中でも休まず続けられ今日に至っている。

(十)長福寺跡

通殿川の水は現在では二基の排水ポンプの所へ堤脚水路で通じているが最近迄向谷門扉から和田吉野川に放流していた、その向谷門扉から東へ数百米の所に昔長福寺と呼ばれた寺があったと言ひ伝えられている。

現在でも其の地点を土木工事等で掘り下げると地下から寺の屋根瓦や古い板碑、墓石等が出土され間違ひなく長福寺跡だった事を物語っている。

(十一)向谷の飛び火で玉作の寺が全焼

百年程前に向谷で大きな草屋根の旧家が失火から全焼した。

その日はすごい西風だったとかでこの火事の最中

に空中高く吹き上げられた火の玉が西風に乘つてドンドン玉作の方へ飛んで行った。

村人があれよあれよと呼ぶ内にこの火の玉が玉作の不動寺の屋根に落ち寺が全焼してしまった。

今でも「向谷の火事の飛び火で玉作の寺が焼けた」と西風の日の火事の恐ろしさが言い伝えられている。

第六分団(相上・玉作)

(一)どんどん橋

昔からこのどんどん橋と呼ばれた橋の東と西に有名な須藤家があった。

玉作側の須藤家は昔から大須藤と呼ばれ大きな玉石で石垣をめぐらし今でも昔の面影をそのまま残している。

西の相上側の須藤家はあぶらや須藤と呼ばれ、門前に二本の松の老木が並んでいる。

この松は始めて橋を作った頃門松の芯を手折って挿して置いたのが活着したと言ひ伝えられた目出度い松の木である。

どんどん橋はこの村境に在って用水の始まりとなっている。

橋は余り大きくないが、そばに椎^い櫨の大木があった。橋は丸太棒をならべて作っており、此の橋を威勢よく渡ると、どんどんという音が響いたのでこの名が生まれた。

又、一説にはしいの木がうつそうと繁茂していたので真昼でも、うす暗く、昔は気味が悪かった所だった。

夕方になるとこの木の繁みから、怪しいうなり声が聞えたり気味悪い光がぼーっと現われたりするので、どんどん逃げ帰ったということからどんどん橋と言われたと言ひ伝えている。

(二)河川問屋

問屋は昔、玉作と相上にあった。

荒川を利用して船で物資を運搬したが、相上玉作の

間屋は本家分家で仲よくこの仕事をしていたとか今でも両間屋は残っている。

(三) 玉作りの地名

船木神社の南の土砂採取場から住居跡が発見された。

そこに昔のかまど跡があり勾玉まがたま（古代・我国で装身具に使ったまがつた玉）を作っていたらしい。

神社の脇に「玉造」と書いた石が残っていることから今の玉造りの地名が生れたと言ひ伝えられている。



勾玉
まがたま

おれはこの世での因念もないからきつとこの有難い光にあえるだろうと考えた。

光ると思われる所にいつて、小さな庵みを結び有難い光を出す佛像を得ようとした。

いく晩もたないある夜、夢を見た。夢枕に一人の童子が現われ『私は攝津せつの国（大阪府）玉造りの多聞天（昆沙門天）だが、太子様が明日佛像を作る人をつかわして不動明王をきざませお前の願いを満してやる』と言ひおわると消えてしまった。次の日異国人がきて「とめてくれ」と言った。

原雄は許した。異国人は喜んでこう言った。

「家主さんは何か心配ごとでもあるのですか。私がお手伝いをしてとめていただいた御恩に報えましょう」といった。

原雄は、めでたい光のことを説明した後、『私はこの土地に佛像を安んじおまつりしたいのだが佛

一説には昔この地で藍を栽培し藍玉あいぎを作ったことから玉作りと言われたともいわれている。後述する不動尊にまつわる話からも地名が生まれたのではないかと思われる。

(四) 玉作の不動尊

不動明王を安置してある。この不動明王のいわれは言ひ伝えによると昔原雄はらおという漁夫がいた。

いつも川のはたに住み夜になると網で魚をとって暮していた。すると、或日の夕方川辺のくさむらの中に光が見えた。その大きさは笠のようであった。

原雄は驚き怖れ茸こけをかきわけ光る所を見ようとした。

ぼうつとして光る場所がきまつていなかった。

続けて三晩もかかってその光をとらえようとした。

像を作る人がまだ見つからない。このことだけが心配なのだ』と言った。

異国人は『私は彫刻が余り上手ではないが家主がもし許してくれたならお造りしましょう。それでは白檀びやくだん香木かうぼく（紫檀黒檀より上質の木）を用意して下さい』と言った。

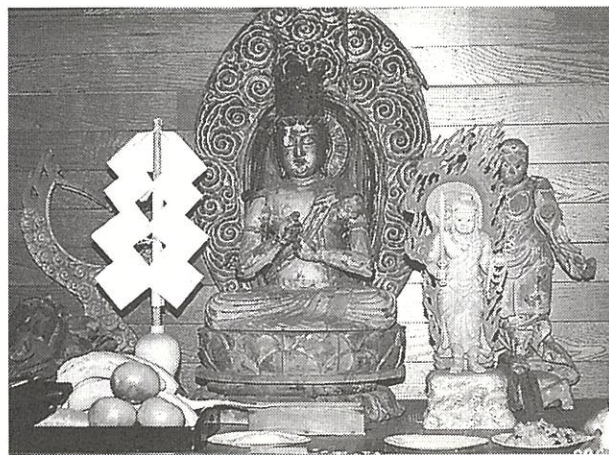
原雄は大変喜んで異国人に庵みを見せた。すると異国人は「私はこの庵の中で七日間佛像をきざます。その間に来たり見たりしないで下さい。全部が終りましたら私がお知らせしますよ」といった。

原雄は承知して家に帰ってきた。

異国人は草庵そうあんに入り戸を閉め切り、仏像の彫刻をはじめた。

八日目の明方になって門をたたく声をきいた、原雄がでてみると誰もいない。

そこで庵に入ってみると一つの箱があった。
尊像は耳が兎、顔は鶏に似た人の像であった。
用明二年聖徳太子（執政五九三―六三〇）が守
屋を討った時白膠メルサの木を用意して四天王の像をき
ざみ頭髪に置いてお誓いのことばを申した。



不動尊

『今もし私を敵に勝たしていただけたなら四天王
を奉して寺をたてますからお助け下さい』と、お
願いすると守屋は戦に負け亡びてしまった。
太子はお誓いの通り攝津せつの国（大阪府）の玉造の
岸の上に四天王を安置し、おまつりをしたと言
うことである。

原雄に夢の中よりお告げのあったのは、四天王
（持目天、広目天、増長天、多聞天）の中の多聞
天であると言われている。

(五) 亀井の井戸

どんだん橋の南百米の所に亀井の井戸がある。
昔この地に亀井六郎清重という武士がすんでいた。
源義経が鎌倉時代に、兄の頼朝に追われて奥州
落ちをするとき、この地に着き急にのどがかわき



亀井の井戸

水を求めた。

清重があたりを見渡したがどこにも水がなかった。とっさの知恵で持っている槍で地面を深く突いたら清水が湧いて出た。

義経はこの水を飲んだ所^か渴^がが癒^いえたばかりか急に体中に生気がよみがえり^{げん}勃然^{はくぜん}と勇気がわいてきた。これを見た清重は早速この水で風呂をわかし入浴させた所、義経は生れ変わったように疲労が回復した。



現在のひざ喰い橋(遠からず改築)

そして元気に、なって奥州への長い旅へ出発することができた。これを伝え聞いた近隣の人々はこの泉を亀井の井戸と呼んだ。

その後、絶ゆる事なく^い霊泉^{れいせん}が湧き出てどんな旱魃にも水の切れることがなかった。進んでこの水を求めて医療にも利用しつづけた。

その後、この井戸に石枠を組んで保存した。写真にもある通り「亀井」と言う文字が井戸桁に刻まれはつきりと残っている。

(六) ひざ喰い橋

相上と津田向谷を結ぶ道路の和田吉野川にかけられた橋をひざ喰い橋と呼んでいる。

この橋について忠犬と大蛇の伝説が今でも残っている。

一般に伝えられている説ではその昔吉見大神宮の宮司である須長家に一頭の愛犬が飼われていたその時代に和田吉野川が増水して橋の上が膝までつかうようになると必ず大蛇が現れて人を悩ましたという。

ある大雨の日、須長家の祖先出羽守長盛と言うお方が津田向谷の方へ急用で出向いた。

この時愛犬も主人の後について一緒に行った。雨がひどいので川が増水して通れなくなつては大変と急いで用を足して帰って来た。

和田吉野川は、すっかり増水してひざ喰い橋はもうひざの上まで水がつかう程なので急いで渡ろうとした。すると愛犬が主人の袖をくわえて離さない。早く渡らないと危い『なぜ邪魔するのか』と叱り飛ばし、無理に追い払うと今度は右手首にがぶりと喰いついてしまった。

見る見る鮮血が流れ出した。

日頃可愛いがっている愛犬だがこの時長盛は、
かっとなつて、左手で腰の小刀を抜いて犬の首を
切り落した。と見る間に犬の首が宙を飛んで向う
岸の柳の大木の上で大蛇が赤い口を開けているの
ど元にがぶりと喰いついた。

『きゃんきゃん』と鳴いて主人に早くこの間に橋
を渡れと合図するかにようにみえた。

急いで橋の上の水を漕ぎ渡った。大蛇が私をねら
っていたのを助けてくれた犬の首に手を合せ忠犬
として葬った。

又、須長家に保存されている文献には次のように
書き残されている。

須長出羽守長盛が吉見大神宮境内の松の大木に
この大蛇めと神前の弓を取って射かけた。

これが時々膝喰い橋に出て人を苦しめたのか今日

こそ退治してくれんと念じた。

一矢は大蛇の目の玉を射抜いた、大蛇は狂乱し
て長盛を一口呑みにしようとした。と襲いかかってきた。
続いて二の矢がみごと大蛇の胴腹を射抜いた。

大蛇はますます荒れ狂って、長盛危しとみえた、
その時愛犬が飛んで来て大蛇のど元に喰いつき
約半日も格闘の末両方とも斃れた。

長盛は愛犬の死をあわれに思つて祠を建てて、
神と祭つてその霊を慰めたという。

今でも吉見大神宮表参道旧四ツ足門跡の左側の所
に「頭犬宮」と記された石の祠が苔むして残つて
いる。



頭 犬 宮

(七) ひよつとこ名人亀井の市さん

亀井の井戸の近くにひよつとこ名人亀井の市さんと言う人が住んでいた。

江戸神田明神三日間の祭礼の屋台で初日に負けた町内会の人々が武州吉見大神宮神楽に亀井の市さんと言う名人が居ると聞き、この人を頼んで明日の叩き合いに名譽挽回しよう、夕方江戸神田を早駕籠で立ち、夜中に亀井にたどり着いた。

泣いて市さんに頼んだ。市さんは裏の大須藤の旦那から五円の金と羽織、袴を借り、着用し朝までに江戸神田に着いた。

早速神楽の太鼓の打ち方おはやしをインスタントで教え込んだ。

いよいよ次の日に屋台を引き出した。大通りの曲り角で市さんが屋台の上から見越しの松の枝に飛

びついた、片足を松の木に引っかきさかさまにぶら下ってひよつとこを踊った。大勢の見物人が、ワーツノワーツと歓声を上げてこの屋台のまわりに集って大拍手をした。

他の屋台は人影もなくみんな負けてしまった。

さあ大変。負けた屋台の連中は武州相上吉見大神宮に日本一の神楽の名人がいるそうだが、これはきつと昨日負けた町内が夜の内にこの名人を頼んで来たに違いないと、とうとう見抜かれてしまった。祭りが終わってから亀井の大先生として各町内に招かれた。

三ヶ月も神楽とひよつとこを教え大金をもらい二人曳きのお駕籠で相上送り届けられた。

大須藤さんの旦那は、神田の人に御馳走して、「これは私のおじいさんだよ」と言っ市さんに男をあげさせた。

第七分団 (箕輪・青山)

この市さんは一生、死ぬ迄大須藤の番頭としてつとめ御恩返しをした。
今でもひよつとこ市さん亀井の市さんとして語り伝えられている。

(一) 青山の小学名と吉見小学校庭

青山に瀧下という地名が残っている。

其の瀧下と続いて霞沢がある、どうも水に縁が深い地名なので太古の時代にはこの地に本当に瀧があったのだろうと言ひ伝えられている。

この瀧下の坂を上りつめた左側が小高くなっている、この所に吉見小学校が大正十一年頃まであった。

今でも昔のままのなつかしい石垣が残っている。今では皆忘れかけているが大正十一年八月、現在の吉見小学校の新校舎が建てられる時、其の広い敷地が地ならしされた折、この地で大里郡連合青年団の体育大会が行われマラソンで日本はもちろん世

界的にも有名になった大先輩金栗四三選手（もとオリンピック日本代表）が来てこの敷地を初めてスパイクをはいて力走した。

まだスパイクなど見た事もない大里郡下各町村から集まった青年団員は目を丸くした。

現在地の吉見小学校を建てた敷地を金栗選手が踏みかためた事実を永久に語りつづけて行きたい。



（二）夜中に鯉をつかまえる名人

○ 昔箕輪の橋場辺に水にもぐって素手で大鯉をつかみ取りにするずいぶん度胸のある人が住んでいた。

ある時葬式の帰りの二人づれが夜半頃、小八林の隅の淵のそばを通りかかった。其の頃隅の淵に大蛇が出ると評判になっていた。「ボシヤ・ボシヤ・ウー」「ボシヤ・ボシヤ・ウー」と言う音が沼の中から聞こえて来た、お清め酒でホロよいかげんの二人づれ、ぶるぶるっと身ぶるいして沼の中を見ると大きな水の輪が出来ている、さては大蛇が鴨を一呑みにした音かと、ころげるように坂をおりきる頃又々ボシヤボシヤウーと音がする、大蛇が出たあゝ二人青くなつて沼のそばを見ると大きな榛の木に提灯と蓑がかかっていた。



他にも人がいたのかと少し気が強くなってじっと沼を見つめていると大蛇が黒い頭を出して沼のへりに近づいて来た、「出たあゝ」二人は腰を抜かして立ち上れないでじたばたしていると何と大蛇ならぬ大男が大鯉を一匹胸に抱いて浮き上つて来た。それが鯉とり名人だったのでやつと安心して三人仲よく話し合いながら帰ったとさ。

○、だがおさまらないのが驚かされた二人

今度その鯉とり名人を反対に驚かそうと相談して暗い夜に箕輪の保安寺のわきの木に綱をつるし一人がふんどし一つになって首つりに見せようとしてぶらさがって居た。

そこへ通りかかった鯉とり名人びっくりして、腰を抜かすかと思いきや、そのはだをさわって見て「何だこれは人間の足か、こんな足つきでは鯉は

とれぬこんな所で鯉取りのけいこをしても駄目だ
俺のまねをするなら俺に鑑札代をよこせと又々あ
べこべにおどかされてしまったとさ。

(三) 一本松をがんばって安く売ってきた人

胄山に一本松と呼ばれる松の太木が有った。

或人が売りに行った。買手の人が「どうだ、五十
円でどうだ」と言ったら「いやいや」と首を横に
振った「ではいくらで売る」「四十五円なら売る
よ」と言ったのですぐ売れた。

そして帰って来て俺は頑張ったぞという顔をして
いた人がいたとか。笑い話が残っているが、今は
その根まで掘ってしまつて跡形もない。

この松はもと荒川の船頭の目印松だったらしい。
今から四十年前も前、昭和十三年頃の話である。

(四) 殿山の由来

箕輪に今でも殿山という所が残っている。

その昔、忍の殿様が箕輪耕地一面に咲きほこる菜
の花を見る為にこの所で休息した、そして乗って
来た馬をつないで休んだので殿山と言ひ伝えられ
ている。

稲村の屋敷は忍の殿様の家来であつた。

今でも殿山から昔の焼物、槍などが出る、かみ村
下の水田をとのやつというが殿山下だからそう言
うのだそう。



鎌倉街道の面影

(五) 昔の鎌倉街道

胄山の八幡様の後の通りはもとの鎌倉街道であ
つた。

これは熊谷の鎌倉町とつながり、いざ鎌倉の通り
道であつた。

昔は、村岡の市が栄え、故森田茂一郎氏（俗称
が藤山）のわきから、今の日高町へぬけた。

街道で、今でも草だらけの小さな道が昔ながらに
所々残っている。

(六) 胄山古墳の由来

胄山は、昔は甲山と書いて歴史的に随分有名だ
つたらしい。中でも旧家根岸家に関する数多くの
貴重な人物史等が残され同家の墓地を訪れると、

重要な資料を見ることが出来る。

今の八幡様は日本でも有名な数少ない古墳で八幡塚古墳として名高い。

高さ五十尺（十五米余）で、周囲百六十間（二百九十米余）の高地に在り、武藏国造（くらみくに地方官）の墓と言われ前方後円墳である。

織田信長の臣、瀧川一益と言う人が関東管領に任じられた頃、本能寺の変を知り一益が急ぎ、京都に出ようとした時、北條氏邦が鉢形城から打って出て和田村（今の熊谷市楊井^{やうい}）で合戦となった。

その際の兵具、甲冑類を埋めて塚を作ったのがこの古墳ではないかとも言い伝えられている。

其の後の調査で上古の陵墓であるとも見られている。

(七) えんとつ房さん

この話は、それ程古い話ではないが、青山にえんとつ房さんと言われる程煙草の好きなおっさんがいた。朝から晩まで鼻の先からブカブカ煙を出し放し、なた豆ぎせるの火の玉を手のひらで、ころころと上手にころがして次の火をつける。

これが長い間続いたので、手のひらはまるでほうろくのように火傷で堅くなってしまい、火をころがしても全然熱さを感じない。

まるで鉄板のようになってしまい、唇は火傷跡のように厚くなり何と驚いた事に四〇分入り（約一五〇g）のキザミ煙草の大包みを一日で吸い尽してしまい、遂に煙突房さんの御尊名をいただいたという面白い話が残っています。

房さんは、運送引きで青山から熊谷の往復でも

煙草の火は消さなかったという。

(八) 箕輪の大蛇

これは新しい本当に有った話である。

昭和四十一年五月青山の山室林造さんという人が苗代作りの目印に使う篠^{しの}の棒を切りに箕輪分の船木沼のそばに行ったら、本当に一升びん程の大蛇がごそごそと大柳の根元をのたうっていた。

山室さん、びっくり仰^{あき}天青くなって、ガタガタふるえながら家に帰って寝込んでしまった。

すぐこの話が役場、駐在所に伝えられ、通学路が近いので万一学校の子供にかみつかれもしたら大変と大さわぎになってしまった。

さあ大変新聞に出る。週刊誌に載る。

話に尾びれがついてしまいいは、大里村に二本の

親指大の角^{つゝ}の有る大蛇出現の噂が八方にひろがり毎日現地の沼だけでも見ようと、こわい物見たさの物好きな人がわんざわんざと押しかけ物売りの店が出る程の大さわぎになってしまった。とうとう東京から蛇取り名人迄が飛び出して、山狩り騒動まで発展してしまった。遂に大蛇は再び姿を見せずじまいに終わってしまったが、大里村箕輪の船木沼大蛇の出た話はいつまでも語りつがれてゆくことでしょう。

(九) 青山の庚申塔

日本に一つしかないと言いつた伝えられている珍しい庚申塔は、現在の青山墓地入口左側に残っています。

高さ一二七糎、横巾五五糎の石塔で最上段に大蛇がのたうち廻っている姿が刻まれ、中心の人物像



胃山の庚申塔

は四本の腕をもち、上の右手は鋭い矢じりで蛇ののど元を突きぬき、下は弓の矢を握っている。

左手は上が花たくを捧げ、下は弓を持っている。

そして足元左右に鶏の雌雄が向い合い、最下段に三猿が刻んである。

この庚申塔にまつわる伝説が残っている。

この地に松の老木があり、太い枝が道路の上に伸びていた。時おりこの枝に大蛇が尾を巻いてぶら下り、大きな口から赤い舌をペロペロ出して人を驚かせるので恐れて、しばらく誰も通らなくなっていました。

こんな事が度々繰り返えされるので、たまり兼ねた村人がこの大蛇を封じ込めようと考えた末、庚申塔を建てて手厚く祀った。

以後再びこの大蛇は現れなくなったとか、今でもこの話は伝え残されている。

第八分団（小八林）

(一)隅^{すみ}の渚、中の渚、新家敷の渚、俵渚、

小八林といえは頭に浮ぶのは隅の渚である。

大きな沼で、この沼は安政二年八月二十三日未明荒川の堤防が決潰して出来たもので、沼端には九頭竜大権現が祀っており、堤防側は断崖で水が澄んで静かであったため、澄の渚、鏡沼とも称された。隅の渚から西の方面に中の渚、新家敷の渚、俵渚と続いていた。

俵渚の名は沼端に大きな俵菜^{ひな}莢^{えん}の木があったので、この名がついたといわれている。

隅の渚と中の渚の間を^{かたしま}中島と呼び、カラス貝を拾いに行ったところ、急に沼の水がにごり大蛇が現れたと伝えられている。

この数々の沼には淡水魚が多く、漁をして生計を立てていた人もあったといわれている。

昭和四十五年の土地改良事業により、新屋敷の淵、俵淵は埋められ今では美田となっている。

沼の大きさは明治末期に比べると道路、堤防の改修等により隅の淵は半分になり、中の淵は六割位になっているといわれている。

(二) 小八林の地名

小八林は日光、八王子街道が中央を通り多くの人々が行き来していた。

堤外に八林小峯^{やっばやま}という渡船場があった。

小八林の名称はここから生まれたといわれている。

この渡船場に十一軒の民家があり、雑貨屋、酒屋、箱屋、石屋、大工、豆腐屋、立場などがあつ

て、川岸町を形成していた。

豆腐屋では、まんじゅうを作って売った。

八ツ林川岸のよねまんじゅうと呼ばれて、名代となり名物となった。この川岸町は昭和十年を中心に荒川の河川改修事業のため移転することになり、大半は堤内にその他の人は他市町村へ移住し、その名残りもないが唯一つ水天宮様の大きな碑が残っている。

(三) 一本松

上恩田に松の太木があった話、又青山に(昭和十三年四月、四十五円で売った)大きな松の木と又小八林にも一本松の太木があったとか、みんな形のよい松の太木で、昔荒川を船で物資を運ぶ当時の船つき場の目標だったらしい。

遠く久下からも見える程の太木揃いだったと、言い伝えられている。

小八林の松の太木は現在の春日神社の裏手にあったものだが、昔荒川を上り下りする船頭がなつかしんだ目印松も、今ではその姿を見る事は出来ない。

(四) 善正坊

昔、明暦年間に善正坊と言う坊さんが住んでいた、今の集会所の所にあった沼に身を投げて死んだと言ひ伝えられているが、その事実を裏づけるように道路改修工事の折、この沼底から人骨がでたと言う話である。

現在も道路わきに明暦八年(一六六〇年頃)六月三日善正坊と記した古い碑が建てられている。

墓だろうと思われる。



(五) 清水の水

三階沼から坂を下りたところ(福島勇さんの裏)に二十坪位の池があり、中はきれいな砂利で池の端の檜の太木の根元から昭和四十年頃まで、良く澄んだ清水がこんこんと湧き出て藤の花を写して

いた、小八林の各家庭の井戸は水質があまりよくないので、大勢の者が飲料水として、使用してきたが、村営水道が出来たのと構造改善事業により今はないが、この清水の有難さは永久に語りつがれることでしょう。

近くに稲荷様と琴平様が祀ってあったが、春日神社に合社したので今はその跡影もない。

(六) 白山さま

旧称宜下^{いさだ}地内に白山様があり虫歯の神様で虫歯で苦しむ人がお願いして、大願成就の時は木綿針三本で鳥居の形を作り、萩の枝につるして奉納した。一回合社したが、又もとの所へもどした。石碑が残っている。

(七) 庚申様

庚申様は仏様とも神様ともつかず、それは十干十二支の配置から出た庚申^{こうしん}のことで、中国の道教の祭典で古く日本に伝わったのだそうで、次のような諺がある。「一言いっても八つ(午前二時)」とか「話は庚申の晩にせよ」などと言い、庚申の晩は村中集ってご供養し、夜の明けるまで話合ったもので、又、庚申の晩に孕^{はら}んだ子は盗人になるななどと悪い言い伝えがあり、この晩は夫婦和合が出来ぬよう一晩中寝ないで話し合って過したのだという。

小八林の庚申様は崇りやすい神でもあり、病魔を除く神様でもあり、特に耳の悪い方は祈願し治ると竹で作った樽に神酒を入れて御礼参りし、大



庚申様

変ご利益があり大勢の者がお詣りしたものでした。又一本杉の根元に稲荷様があつて、子供の夜泣き

にはお願いすれば、必ずなおると言い信仰する者が多かった。



横堤

(八) 横堤について

昔から小八林地区には洪水があり、その水が今の吉見町に押し寄せて行った。

吉見領の人々は大変困り、その水をくいとめようと努力した。

荒川堤防や山と一番近い小八林と話し合いの上で、土地は小八林がもち、その代り敷地分の土地は田甲と上砂で小八林に渡すことで話はまとまり土は吉見領が持ち、沢山の人も吉見領の人が出て、^{しん}奮や馬で東西に長い横堤を作りあげた。

今度大芦橋が完成すると同時に残っている横堤も改装され東松山地区に通ずる県道が新設された。この横土手を作る、作らせないで裁判沙汰にまで持ち込まれそうになった。当時の一切の始末記は玉作の大須藤家に保存されている。

(九) 小八林の天王様と神輿

大里村に只一つ天王様の神輿が小八林にある。

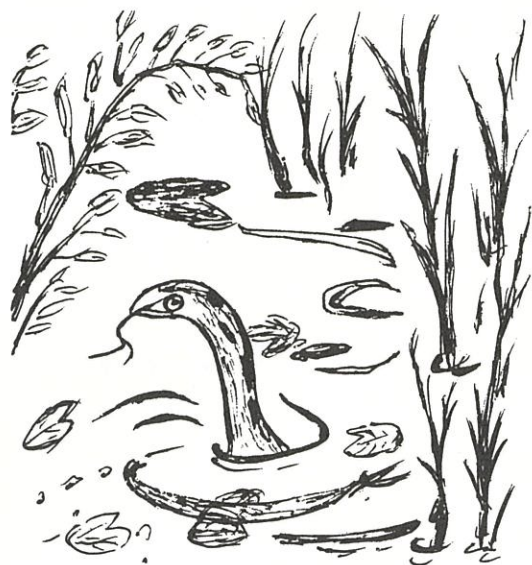
五〇〇年位前からあったもので、はじめ黒塗りだったが、慶応二年に現在のように改装されたという事で、毎年七月二十四日二十五日が祭礼で、昔は本祭などは近村の善男善女多数の参拝者があり、随分にぎやかに行われた。

神輿が村中をまわり悪魔払いを終ると、最後に小八林河岸で神輿を荒川に放り込んで、一切の悪魔を川に流し醤油飯のおにぎりをいただいで引上げたものだ。

現在でも七月二十四日二十五日小八林の天王様は昔のおもかげはないが、ささやかながらこの行事は引継がれている。又、この天王様と同じ頃から獅子まわし（かざまつり）があり、若衆が獅子

を扱い、子供は幣^{へい}束^{たき}又は玉串を持って、全戸をまわり悪魔払いの行事が四月十六日に行われたが、現在は四月十五日に非常に簡略され、関係者数人の者で獅子まわしの行事が行われている。

いづれも小八林に伝わる古くからの行事で、いつまでも引継がれて行くことでしょう。



(十)大里村の大蛇

大蛇の話は村内各所に残っているが、歴史的に最も古いのが膝喰橋の伝説である。

手島の石宮にも、大蛇が住んでいたという説もあ

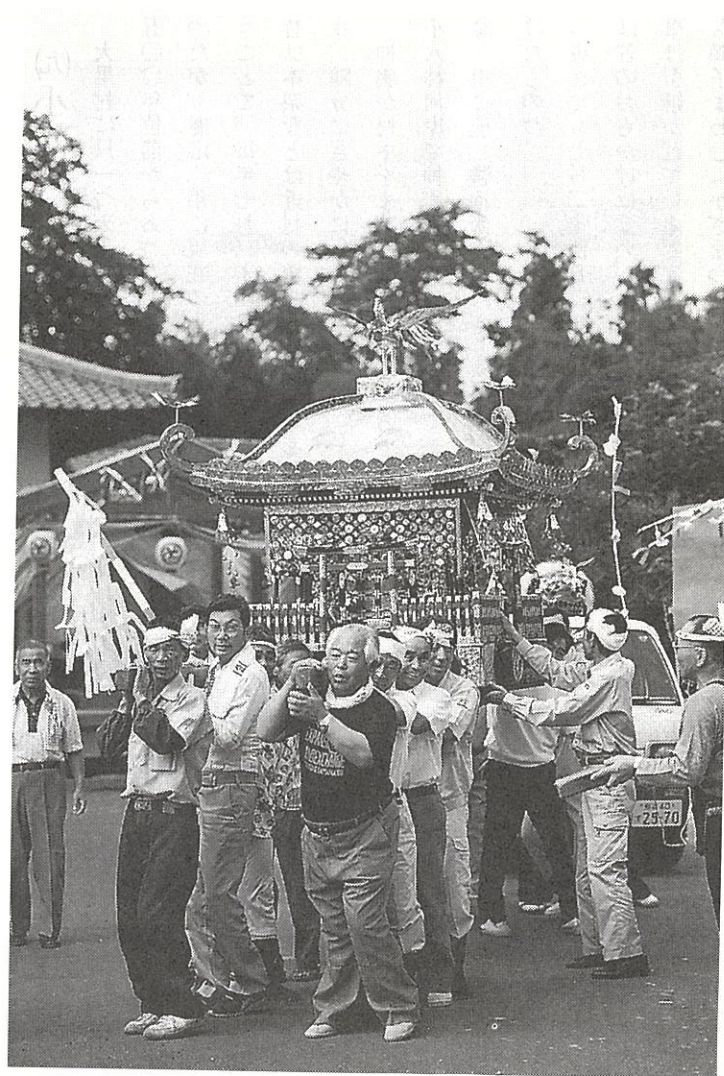
る、今から二十年代前に小泉の堤外の三十間沼（市田太郎の館跡）に現れて、道路を横断するのを見た人も居る。

その後、沼黒の和田吉野川の中の芦の物凄く生い繁った中で、大蛇を踏んづけた人もおり、又小八林の隅の淵に現われ、箕輪の舟木山の方へ移動して行くのを二人の者が見ている。

十年前前にも、舟木の沼の端で大蛇を見て、非常に驚いて寝込んでしまい、新聞紙上や警察署まで騒がしたこともある。

蛇は三十回も脱皮すると、もう脱皮しないで黒茶色になり、その後は何年位生きているのか解らないそうである。

その後、大蛇を見た人もなく、家畜などの被害もないが、以上のように大勢の発見者が居たことから、現在も何処かにいるのではないかとも思わ



神 輿

れる。

このように大里村民と大蛇のかかわりあい、世間話のたねとして、親しまれ永久に伝えられて行くことでしょう。

大里村のかたり草資料提供者

○第一分団

吉沢政一	大久保次郎	吉田武次郎	梅沢徳春
清水実治	高山昇三郎	矢島 信俊	鈴木光治
栗原みつ	吉田うめの	君山 かん	吉田かね
梅沢まさ	長谷川よし	長谷川のぶ	武田ひろ
武田くに	深作 きよ	清水 こう	清水あき
田中せき	若林 よし	清水 かつ	原 ちか
堀りか	外 五 名		

○第二分団

田部井宗一	洪沢一二	関根義治	飯田幸三
長谷川久雄	金井虎市	染野一郎	木村政五郎
金久保万作	島田辰次	島田しま	島田万吉
梅沢多一郎	田所常久	竹井 晃	金井義雄
田所留吉			

○第三分団

篠崎 進	金子近義	高橋詮祥	高橋 義男
山崎 清	田口新一	松本啓三	吉野 仁造
木村 茂	門叶利武	金子徳明	小沢 友子
山岸茂夫	田口ハル	山岸ツメ	山岸 かつ
小林キミ	田口りん	山岸クニ	田口庄次郎
福島ツマ	関根キウ	関根ゆき	山岸芳太郎
山崎テエ	田口よし	山崎アサ	山岸仙十郎
山崎ちか			

○第四分団

小池嘉平	戸森政吉	吉野利明	藤野芳太郎
鈴木正一	鈴木正生	吉野文男	大久保タケ
塚本清治	加瀬彦次郎	大久保源左エ門	
鈴木浅次郎	宮崎和一	塚本嘉平	大久保晴
大河原重三			

○第五分団

齊藤喜安 矢島捷平 小林種慶 小貝岩次郎
三村伝造 小貝弁三 小貝利次 大久保徳治
矢島三国 小林福次 菅間雅雄 島田英性

○第六分団

浅井金次郎 自在一郎 岡本牧夫 矢島たつ
須藤徳次郎 須藤ヨネ 小沼ゆき 須長はな
大久保きん 須長なを 浅井とき 矢島つる
小池ふじ子 浅井ぎん 自在しも 渋谷ふく
松本角太郎 渋谷ふみ 高橋はな 小島なか
町田 作三 平 たね 柿沼あい 柿沼よね
柿沼 みち 栗原シナ 須藤かね 須藤みち
根岸 ヨシ 柿沼やす 須藤いと 山室さと
山室 よね 須藤文次 須長二男

○第七分団

飯島 弘 今井正治 矢島重三 落合惣兵衛
新井丑松 根岸初治 小林せん 岡田のぶ子
橋本しま 志村つま 村松千代 福田 ツイ
新 マサ 新 まき 鳴 きく 須川 喜八
新 キヌ 新井音五郎 根岸喜夫

○第八分団

堀 嘉七 保住喜一 長島勝次 松本光之助
松本常吉 堀六三郎 宮下一郎 福田俊太郎
福田タケ 堀好一郎 福田スイ 金子 栄助
堀きゆう 長島 卓 須藤平造 長谷部勝次
福島信義

あとがき

郷土文化の資料を残すことは、現代に生きる私達に課せられたものであると思います。

先人達の生活様式を知り、世間話にふれることは人生に潤いを与えるものであります。

このたび、公民館事業において、高齢者教室の一端として民話の発掘と題し、一年半の歳月と百七十余名の資料提供者の協力を得て『大里村のかたり草』が発行の運びとなりました。

紙面に載らない数多くの資料がありました。が割愛させて頂きましたことをお詫び申し上げます。事務局も初めての出版で、文章表現、写真、カット、となれない仕事でありましたが編集に当たりました人々の協力で仕上げる事が出来ました。ことに老人会長さんには、集会の設定ならびに人

選等御苦労下されましたことに厚く感謝を申し上げますと共に印刷に当り、根岸印刷所に御便宜をはかって下されたことに対しても、深く感謝の意を表する次第であります。

末長く人々の心の中に民話が美しく語り継がれますことを念願して、あとがきとします。

大里村教育委員会

大里村のかたり草

昭和五十三年十一月二十日 印刷
昭和五十三年十二月一日 発行

編集・発行 埼玉県大里郡大里村大字吉所敷六三五番地

大里村教育委員会

印刷所 行田市上池守七三七番地

根岸印刷所

—— 編集後記 ——

*初版本から二十年が経過しており、既に保存部数しかない状況が続いていましたので今回、復刻版として刊行いたしました。

本書の刊行を機に改めて郷土の歴史や文化財に對しご理解をいただければ幸いです。

*掲載された文化財や歴史事象に関しては諸説がありますが、本書では昔から伝わっているものをそのまま載せた当時の編集方針に従い復刻と致しました。

尚、写真につきましては、改めて撮影しなおしたものを使用しております。

復刻版 大里村のかたり草

発行日 昭和五十三年十一月二十日（初版）
平成十年三月三十日（復刻版）

編集 大里村教育委員会
発行 〒三六〇一〇一九五

埼玉県大里郡大里村大字中曽根六五四―一

印刷 巧和工芸印刷株式会社

〒三三三二〇八四二

埼玉県川口市前川三二二五―三